西村豐編纂

東洋史

東京 六合館發行

凡例

一　本書は主として支那古今治亂の大要を叙し傍ら之に關係せる東西洋の史流と著名なる人物の言行の一班とに波及したり

一　本書は事實を主とし理論を避け脉絡條理の貫通せん事を期したり

一　本書は授業時數に適合せしめん事を期し紙數に定限あるを以て紀事自ら簡略ならざるを得ず然るに往々詩歌諺語を交へたるものは記誦の便と參攷の資とに供せんが爲めなり

一　本書は短日月の編纂に係かるを以て恐らくは紀事の錯誤と文字の魯魚とを免かれさるべし讀者幸に指摘

の勞を吝む勿れ

明治三十二年十二月

西村豐識

中等東洋史目次

上世史

第一篇　三皇五帝……一
第一章　開闢の傳說堯舜の治……一
三皇の創始　五帝の興隆
第二篇　夏殷周……四
第一章　夏殷の興亡……四
夏の盛衰　殷の興亡
第二章　周初の盛衰……七
周の興起　成康の治　周の內亂　周の東遷
第三章　春秋の形勢……一二

覇者の興起　陪臣の專横
第四章　戰國の鬪爭……二〇
七國の雄峙　合縱連衡の策　山東の形勢
秦國の東侵　六國の滅亡
中世史
第一篇　秦漢……三〇
第一章　秦の盛衰……三〇
始皇の政治　秦室の滅亡
第二章　漢楚の交鬪……三三
楚の分封　楚の滅亡
第三章　漢初の治亂……三五
高祖の創業　呂氏の禍　七國の亂

第四章　武宣二帝の治蹟……三八
武帝の文治　武帝の武功　霍光の輔佐
宣帝の治世
第五章　外戚の僭竊……四二
戚官の黨比　王氏の驕恣　新莽の僭亂
第六章　光武の中興……四五
光武の政治　外蕃の服屬
第七章　外夷の叛服……四七
明章二帝の治　和安二帝の世
第八章　戚宦の禍……五〇
戚宦の廢立　黨人の禁錮
第九章　漢の末路……五三

董氏の變亂　諸雄の群起
第三篇　三國及兩晉南北朝……五七
第一章　三國の鼎立……五七
三國の交戰　五丈原の戰　三國の滅亡
第二章　西晉の隆替……六一
武帝の政治　諸王の變亂　五胡の侵入
第三章　東晉の形勢……六四
江東の內亂　北胡の形勢　東晉の北征
肥水の戰爭　東晉の衰滅
第四章　南北朝の分立……七一
宋魏の交鬪　魏齊の治亂　梁魏の形勢
齊周陳の存亡

第三篇　隋唐五代……七七
第一章　隋の興亡……七七
文帝の肇基　煬帝の偉略　隋家の滅亡
第二章　唐初の隆盛……八〇
高祖の統一　太宗の治蹟
第三章　武韋の禍……八三
武氏の僭竊　韋氏の弒逆
第四章　玄宗の政治……八六
開元の治蹟　安史の亂階
第五章　安史吐蕃の亂……八八
祿山思明の叛　吐蕃回紇の患
第六章　藩鎭の禍……九一

諸鎭の叛亂　憲宗の平鎭
第七章　宦官の患及牛李の黨……九六
閹官の驕恣　牛李の朋黨
第八章　唐の末路……九九
海內の紛亂　唐室の滅亡
第九章　五代の更迭……一〇二
梁室の存亡　唐晉の存亡　漢周の存亡
第四篇　宋……一〇七
第一篇　宋初の隆替……一〇八
宋室の統一　契丹の戰和　西夏の關係
朝臣の朋黨
第二章　神宗の政略……一一三

安石の新法　遼夏の邊隙
第三章　哲宗徽宗の世……一一八
高氏の更化　哲宗の紹述　徽宗の昏德
第四章　金人の來寇……一二四
金人の來去　汴京の陷沒
第五章　金宋の戰和……一二七
宋室の復興　高宋の播遷　金宋の媾和
金亮の入寇　宋金の小康　侂胄の專恣
第六章　金宋の末路……一二九
蒙古の興起　金國の滅亡　蒙古の來侵
宋室の滅亡
近世史

第一篇　元……一五一
第一章　元の混一……一五一
世祖の外征　世祖の内政　汗國の形勢
第二章　元の末路……一五七
順帝の荒政　元室の紊亂
第二篇　明……一六一
第一章　明初の治亂……一六一
太祖の宏謨　燕王の南侵　成祖の偉略
第二章　内宦北虜の禍……一六九
瓦剌の來寇　内宦の跋扈　藩王の異圖
第三章　北虜南倭の患……一七五
北虜の入寇　南方の倭亂

第四章　神宗の政跡……一七九
朝鮮の出師　滿洲の肇興　朋黨の排擊
第五章　明室の末路……一八六
三案の黨議　滿洲の形勢　流賊の蜂起
清人の侵入　明裔の南遷　鄭氏の義擧
第二篇　清……一九五
第一章　聖祖の偉略……一九五
聖祖の諸政　三藩の變亂　臺灣の平定
露國の交涉　準夷の親征　西藏の蕩平
第二章　高宗の紹熙……二〇六
準夷の叛服　回部の掃蕩　烏什の變亂
西南の戡定　高宗の内治

第三章　嘉慶の紛擾……二一六
教匪の騷擾　回部の叛服
第四章　清室内外の禍……二一八
鴉片の戰爭　髮賊の內亂　英佛の來犯
露國の東略　同治の刷新　臺灣の紛議
第五章　清室の近況……二三二
伊犂の談判　安南の事件　朝鮮の關係
日清の戰爭

中等東洋史目次終

中等東洋史

西村豐編纂

上世史

第一篇　三皇五帝

第一章　開闢の傳說及堯舜の治

三皇の興起

太古の民俗

支那開闢の始は民、皆、顓蒙無智にして禽獸の皮を衣、草木の實を食ひ、野處穴居して蠢動するのみなりしが、當時君長たるもの、迭に其間に出て漸く民物を啓きしものゝ如し、其尤も著れたるものを燧人、伏羲、神農の三氏とす是を三皇と稱す

燧人氏は燧を鑽りて民に火食の術を傳へ伏羲氏は八卦網

罟を作り成紀（陝西省鞏昌府秦州）に起り陳（河南省開封府陳州）に徙る神農氏は稼穡交易の道を開き姜水（陝西省鳳翔府寶雞縣の南）より移りて曲阜（山東省兗州府曲阜縣）に邑したり、惟り燧人氏の興起何れにあるか未た之を詳にせず、然れども伏羲、神農の二氏已に西北より起りて今の山東、河南の地に徙りしものなれば支那開闢の由來する所、知るへきなり

古代文字 金石彙

五帝の興隆

三皇に繼きて黃帝、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜の五帝起れり、黃帝は有熊（河南省開封府新鄭縣の境）に起り神農氏を伐ち蚩

尤等の諸雄を征す、東は海に西は崆峒（甘肅省肅州高臺縣の西南）に抵り、南は江水より北は葷粥を逐ひ釜山（直隸省宣化府保安州）に登り、始めて一統の業を成し自ら天子と爲りて涿鹿（直隸省宣化府保安州）の阿に都す、是に於て野を畫し州を分ちて封建の基を爲し宮室を作りて穴居の俗を改め棺槨を製して葬歛の道を敎へ其他、文字、舟楫、弓矢等をも創製せりと云ふ

黃帝の後、顓頊は若水（四川省雅州榮經縣）より起りて帝丘（直隸省大名府開州）に邑し、帝嚳は亳（河南省歸德府商邱縣）に居りしが其子堯に至り平陽（山西省平陽府臨汾縣）に都し、聰明至德を以て、萬邦を協和し人民を撫し共工、驩兜を罪し苗族を征し大に治敎を布き又、羲、和二氏に命して曆を作らしむ、當時、洪水氾濫せるを以て鯀をして之を治めしむ、然るに其功擧らざりしかば舜を畎畝の間に擧けて相となし、政を攝せしむ舜因て鯀の子、禹をして治水の

禹の治蹟

任に當らしむ、禹八年を歷て完く其功を奏し、又九州の野を分ち、土田貢賦の制を立てり、堯の子丹朱、不肖なり、堯因て在位七十二年を以て天下を舜に遜る、

舜の治蹟

舜は都を蒲阪（山西省蒲州永濟縣）に命し、九官を命し、十二牧に咨り、朝覲巡狩の禮を治め、律度量衡の制を定め、刑辟考課の法を設け禹、契、皐陶、益、稷の諸賢、朝に立ち政大に治る、子商均、不肖なり舜因て在位六十一年を以て禹に禪る、是を夏の禹王と云ふ、凡、我紀元前千五百四十八年の頃にあり、

第二篇　夏殷周

第一章　夏殷ノ興亡

夏の盛衰

禹は舜の禪を承け安邑（山西省解州夏縣）に都す、其洪水の後を承くるを以て、儉素を主とし宮室を卑くし服食を

夏の内亂及中興

商の興起夏の滅亡

湯の治蹟及伊尹の攝政

菲くし儀狄の酒を斥け、遂に位を其子啓に讓り、始て父子傳承の例を啓きたり、

啓の時、有扈氏を甘（陝西省鄠縣の南郊西安府）に滅す其子太康に及ひ政に怠る有窮の君、羿、太康の弟仲康を立てゝ政を執り其子相の時に至りて、遂に位を簒ふ其臣寒浞、又、羿を殺して自立ず夏統一時中絶せしか相の子少康は寒浞を滅して之を中興せり、少康より十一傳して桀に至り暴政を行ひ民財を殫す時に諸侯に湯と云ふものあり伊尹を用ひて相と爲し人心を收め、遂に桀を南巢（安徽省廬州府巢縣）に放ち帝位に亳（河南省歸德府商邱縣）に即き國を商と號す夏は凡、十七世四百五十八年にして亡ふ我、紀元前千九十年頃にあり

殷の興亡

湯は伊尹、仲虺等の賢に任し桀の苛法を除き氏、羌（西方ノ夷狄）の諸夷來り服す其孫太甲に至り、湯の典刑に遵

殷の中興

はす、伊尹、之を桐(山西省絳縣)に放つ其過を悔ひ自ら脩むるに及ひて訓を陳へて去れり

太甲の後王室一時衰へたりしも大戊、祖乙、盤庚、武丁等の賢王交、出て商道復、興る、盤庚は都を殷(河南省河南府偃師縣)に徙し國を殷と稱し、武丁は傅說を版築の間に擧け殷道大に興れり

紂の暴虐

箕子微子比干伯夷叔齊

武丁四世の後、武乙は都を朝歌(河南省衛輝府淇縣)に遷し、荒淫無道なり、其曾孫紂に至り小人に任し姐己を寵し奢侈を窮め、刑辟を重くせしかは百姓大に怨み畔く者あり比干は之を諫めて死し微子は去り箕子は奴と爲る然るに其惡已まさりし

箕子の東逃及殷の滅亡

かは、周侯昌の子發兵を率ゐて紂を伐つ伯夷、叔齊と云ふもの之を止む、然るに發、進て紂を牧野(河南省衛輝府の南郊)に破り遂に天子と爲る、是を周、武王と爲す、箕子は東の方朝鮮に逃れ其開國の祖と爲れり、殷、凡、二十八世六百四十四年にして亡ふ

我、紀元前四百四十六年なり

第二章　周初の盛衰

周祖の基業

周の興起

周は始祖、棄より世、德を積み岐(陝西省鳳翔府岐山縣)豐(陝西省西安府鄠縣豐水の上)の地に居りしか亶父の孫、西伯昌(文王)西方諸侯の心を得、天下三分の二を有てり、其子武王に至り、父の業を繼ぎ太公望を用ひて殷を滅し鎬(陝西省西安府)に都せり、

武王の封建

武王既に天下に君臨するも猶、殷民の叛かんことを恐れ、紂の子武庚祿父を其都朝歌(河南省開封府鄭州)に封し殷人の心を和け、其弟叔鮮を管(河南省新鄭縣)に叔度を蔡(河南省汝州府新縣)に置き殷の監察を爲さしむ又、公、侯、伯、子、男の五爵を設けて先王の後を封し功臣宗族に土地を頒け太公望を齊(山東省青州府昌樂縣)に弟周公旦を魯(山東省兗州曲阜縣)に、庶叔高を畢(陝西省西安府咸陽縣畢原)に召公奭を燕(直隸省順天府薊州)に

兄弟、凡十五人、宗族四十人、異姓二十四人、其他、子男、附庸の小封は號して千八百餘國と云ふ、

成康の治　武王崩し其子成王幼かり、周公之を輔け政を攝す時に叔鮮、叔度は周公の異志あるを流言し武庚を擁して兵を擧く、奄（山東省兗州の東）及淮夷（淮水南方の夷）徐戎（安徽泗川邊の夷）之に應し東土騷擾せり周公之を平け武庚を誅し、叔鮮を殺し、叔度を放ち更に紂の庶兄微子を宋（河南省歸德府商邱縣）に封し、殷の祀を奉せしめたり、又鎬は西方に偏し東土を治むるに不便なるを以て洛邑（河南省河南府）に王城を築き東都となし、成王をして時に臨み諸侯の朝を受けしめ已、留まりて東方を治し鎬を以て西都となし成王をして常に此に居り召公をして西方を主らしめ其他、心を禮制文物に用ひ、官制は天官冢宰、地官大司徒、春官大宗伯、夏官大司馬、秋官大司寇、冬官大司空の六

官を置きて政務を分掌せしめ、又井田の法を設けて、意を農事に致せり、兵制は伍、卒、旅、師、軍に編成し、天子は六軍、大國は三軍、次國は二軍、小國は一軍と定め平時は農となり、事あれば兵と爲らしむ、敎育は王畿より諸侯の國に至るまで、大學小學を設け、又家塾をも置かしめ、王侯より士庶人に至るま

（石　案）

て學に向はざるなからしむ、其他、冠婚葬祭の儀、養老、鄉飲酒の禮等をも制定し、大に海内を制す、時に息愼（朝鮮咸鏡道北部）は東方より越裳氏（今の安南）は南方より來貢せり成王の子康王の時も亦克く治れり蓋し周室の制度文物粲然として備はり成、康に至りて隆盛の極に達せるものは全く周公の力あり

昭穆夷王の荒政

周の内亂　康王の子、昭王に至り周道漸く衰ふ、王は先王の遺制に背き、南方、楚を伐たんとして漢水（湖南省漢陽府城北）を濟り、楚人の爲めに溺死せらる、其子穆王即位の初は頗る心を政治に用ゐしか晩年海内を遊行し、犬戎（西夷の一種）を征し、諸侯の心を失へり、其後夷王に至り、王室益、衰微して、朝覲の禮廢れ、王自ら堂を下りて諸侯を見る、厲王に至り暴虐甚し、國人叛きて王を彘（山西省平陽府東北州）に放逐するに至る

宣王の中興

其子宣王に至り、内は周召二相、及、申伯、仲山甫に任し外は方

叔、尹吉甫に命して南、荊蠻を征し北、玁狁を伐たしめ又、自ら徐戎を征し王業を恢復せり、然れとも晩年姜戎と戰ひ敗績せしより、其政大に非なり、當時太史籀は大篆を創め古文字大に變したりと云ふ

幽王褒姒を寵す

周の東遷　宣王の子、幽王立ち褒（陝西省漢中府褒城縣）を討つ、褒人女を納る、是を褒姒と云ふ、王之を愛し、太子宜臼、及、申后を廢して褒姒を后とし、其子伯服を以て太子と爲す、宜臼出てゝ申（河南省南陽府）に依る、申侯怒り犬戎を召して來寇し王を驪山（陝西省西安府臨潼縣）の下に弑し褒姒を虜にす秦、晉、鄭、衞の諸侯來り救ひ戎を平け宜臼を迎へ立つ是を平王とす

平王の遷都

平王は犬戎の其都に逼近せんことを恐れ鎬京を棄てゝ岐豐の地を秦に與へ洛邑に遷る是を周の東遷と云ふ武王より此に至るまて凡、十二世三百五十三年（紀元前十年）なり、是より

後の事は春秋に詳にするを以て春秋の世と稱す

第三章　春秋の形勢

春秋の列國

齊桓公

覇者の興起　周室東遷の後は、戎狄益、侵し諸侯益、恣に齊、楚、晉、秦、魯、衞、宋、燕、鄭、曹、陳、蔡、吳、越の諸列國互に鬪爭して王室の威令、復、行はれず此時に當り王室を尊ひ夷狄を攘ひ諸侯不廷の徒を討し、以て覇業を成すものあり、齊桓公之を始めきて宋、襄公、晉、文公、秦、穆公、楚、莊王、吳、闔廬、越、勾踐等起れり、是を覇者と稱す、

周、平王より桓王、莊王を歷て釐王の時に至り齊、桓公は專ら管仲に任せり、仲初め公子糾に傅と爲り桓公に敵せしが、其友鮑叔の薦に由り、桓公に歸し、富强の術を謀り諸侯を北杏（山東省泰安府東阿縣の東）及、葵邱（河南省歸德縣の東考城縣の東）等に會〳〵南、楚を伐ちて

宋襄公

王子帶の亂

晉文公

周に貢せしめ北、山戎を伐ち邢、衞を興し三十九年の間桓公をして諸侯の盟主たらしめしか、桓公死するに及ひ國亂れ、宋、襄公之に續いて起れり

宋、襄公は桓公の遺託を受け、桓公の子、孝公を立てゝ齊の亂を平け鹿上、及、盂（河南省歸德府睢州）の會盟を爲し後、楚と泓水（河南省歸德府）に戰ひ創を被りて死せり、是より楚人中原を侮り屢、其患を爲せり、初め周の襄王は狄女を納れ后となしゝに后私かに王子帶を寵して黜けられたりしかば是に至りて子帶狄人を導きて入寇し鄭に奔る時に晉、文公の大夫狐偃と云ふもの文公に謂て曰く諸侯を求むるは勤王に如くはなしと文公乃ち兵を以ゐ狄を襲ひ子帶を殺し王を納れたり

晉、文公は河汾の東、要勝の地に居り其祖文侯、及、父獻公の餘烈に依り諸侯に覇たり初め文公父の寵を失ひ狐偃、趙衰、介

子推等を從へ出亡し歸り立つに及ひ齊、宋、秦の諸侯を以ゐて楚を城濮(山東省晉州の南)に破り其囚を襄王に獻し諸侯を踐土(河南省開封府滎澤縣の西北)に會し盟ひて曰く王室を弊けて相害するここなけんと其子襄公に及ひて姜戎を以ゐて秦穆公の兵を殺(河南省河南府永濟縣の北)に破れり

秦穆公

秦、穆公は其祖襄公以來周の舊都、岐、豐、要害の地を有ち〳〵か、是に至り蹇叔、百里奚の徒を用ひ大に地を開き國を益し他日一統の地を爲せり其後、世〻晉と怨を構へたりしかは、楚、莊王は之に乘して兵を中原に出したり

楚莊王

楚は南方、鄀(湖北省荊州府)に都し江、淮し險に據の世、近隣を蠶食しも周の末た奪ふへからさるを知り、退きて晉と大に邲(河南省開封府鄭州の東)に戰ひ之を敗りたり、然るに其子共王は晉と鄢陵(河南省開封府鄢陵縣)に戰ひ

て大に破られたり

宋向戌鄭子產

斯く晉楚久しく怨を構へ列國、亦、干戈を弄して止まさりしかば宋の向戌大に之を憂ひ先つ兩國に往來し遂に周、靈王の時、晉、楚、魯、衛等の十二列國をして弭兵の會を宋に開き北方一時平穩に歸せり鄭、亦、公孫僑(子產)政に參し禮を以て能く兩國を待ち其侵奪の禍を免れたり斯く北方稍平穩の時に際し南方强を張り楚に抗するものを吳と爲す

吳壽夢季札闔廬孫武

吳は南方荊楚の地を有し世、中原の擯斥を免れさりしか、晉、楚交、怨を構へし時に當り晉は私かに吳に乘車戰陣の法を傳へ楚に抗し其勢を分たしめんと爲しゝか是に至り壽夢は益、兵を强くし屢、楚を伐ち始て江東に覇たり其子季札賢を以て聞ゆ其後、闔廬の時に至り、楚人伍員の策を用ひ楚都に入り又齊人孫武の兵法を用ひて兵を强くし越王勾踐と

夫差

伯嚭及伍員

越王勾踐

吳の滅亡

范蠡

北方の形勢

擒李（越の地浙江省嘉興府）に戰ひ破れ傷きて死せり子夫差は周敬王の時に當り越を夫椒（山名江蘇省常州府無錫縣）に破り父の讎を復す勾踐逃れて會稽山（浙江省紹興府會稽縣）に據む太宰伯嚭越の賂を受け伍員を譖殺し遂に越の爲めに滅されたり

越は世會稽（浙江省紹興府會稽縣の東南）に邑し吳と相攻めしが勾踐に至り始て僭して王と爲り大に吳を伐ち敗績す後范蠡に任し士民を拊循し然る後大擧して吳を伐ち夫差をして枯蘇山（江蘇省蘇州府城西）に逃れしめて之を滅し齊晉等の諸侯を徐州（安徽省安慶府）に會し貢を周に致し周元王の命を受て伯と爲り威を江淮の間に振へり然に范蠡去るに及ひて越は國勢次第に衰へ遂に楚の爲めに滅されたり

陪臣の專橫　斯く南方の强國互に鬪爭殘滅を事とし北進の勢無かりし時に當り北方の列國亦次第に衰微し權門

魯の三家

强族之に乘して征伐會盟の權を專にし其威諸侯に侔しく王室愈微に周初千八百の封國已に減して一百二十餘國となり其大あるもの十四列國も今又其數を減せんとす是を陪臣專橫の時と爲す其著しきものは魯の三家齊の田氏晉の六卿是なり

魯の孟孫叔孫季孫の三家は桓公の子孫を以て世國命を取り公室を弱めたりしか定公の時に至り孔子相の事を行ひ公を輔け齊景公に夾谷（齊の地東山省泰安府萊蕪縣の東）に會し其侵地を魯に復へさしめ〻む時に三家兵甲を蓄へ益專橫を極めしかは孔子は定公に請ひ門人仲由をして季氏の宰と爲らしめ其甲兵を收め都城を墮たしめんとせしかは叔孫氏は邸（山東省泰安府東平州の近傍）を墮ち季氏は費（山東省費縣）を墮ち魯大に治れり然るに孔子去りて哀公悼公の時には三家地大にして魯は小

孔子老子莊周列御寇楊朱墨翟

孔子曲阜廟

諸侯の如く爲れり

孔子名は丘、字は仲尼魯人なり魯を去りて後、諸侯に歷遊すれとも皆用ひられす乃ち先王の道を修めて歷世の尊崇する所と爲り周の敬王四十一年(我懿德天皇卅二年)を以て卒す壽實に七十三老子は楚人にて孔子と時を同しく道學を以て著はる其後、列禦寇、莊周の徒、皆、老子の學を祖述せり

(寫 其)

晋の六卿

齊の田氏晏嬰

又、楊朱、墨翟あり楊朱は自愛説を唱へ、墨翟は兼愛節用の説を唱へたり、

齊の田氏は、陳、厲公の後なり、厲公の子完、齊、桓公に事ふ其後、田乞に至り、景公の大夫と爲り、私惠を民に行ひ、公室を簒はんとせり、時に賢相晏嬰と云ふもの常に田乞の禍心を以て憂とせしか、田乞果して其君、孺子を弑したり其子、田常、又、簡公を弑し西、晋の韓、魏、趙三氏に結ひ南、吳、越に通して歡心を得、遂に田和に至り其君、康公を海上に遷し周、安王に迫り晋の韓、魏、趙三氏に續きて諸侯となれり

晋の韓、魏、趙三氏は范、知、中行氏と共に六卿と稱し世、力を晋室に致し靈公の時、欒、高二氏の難を平け悼公を立て文、襄二公をして覇業を振起せしめたりしか後、知氏は趙、魏、韓氏と范、中行氏の地を分ち遂に哀公の時に至り知氏亦、韓、魏、趙氏

の爲めに滅されたり、是より三氏益、恣に趙籍は邯鄲（直隸省廣平府邯鄲縣）に魏斯は大梁（河南省開封府）に韓虔は新鄭（河南省新鄭縣）に邑し、周の威烈王廿三年を以て侯と爲り、遂に晉、靜公を廢して家人と爲し、其地を分てり是を三晉と稱す、周、威烈王二十三年は我、紀元二百五十八年にして、是より後、諸侯強は弱を凌き大は小を併せ戰亂息むことなく、號して戰國の世とす、

第四章　戰國の鬪爭

七國の雄峙　周、威烈王より安王を歷て烈王の時に至りては、周家の威已に地に墜ち、僅に河南一小黑子の地を保つに過ぎされは、周は有れども無きか如きのみ、是の時諸侯の國、西に秦あり、南に楚あり齊、燕、東北に據り韓、魏、趙、中位を占め境土相敵し、兵甲相當る是を戰國の七雄國と稱す、斯く七

國各、雄峙して士を招き、賢を禮し富强を謀るを以て士、亦、各、自ら能くする所を以て榮達を求んとして俊偉の士彬彬輩出せり、

魏、文侯（斯魏）は諸侯と爲りしより卜子夏、田子方の賢を擧け樂羊をして中山（白狄の別種直隸省眞定府）の夷を伐たしめ、西門豹をして鄴（河南省彰德府臨漳縣）を守らしめ、李悝をして平糴法を作らしめ、又衛人吳起を擧けて、秦の五城を拔かしむ、吳起は當時の兵法家なり後譖せられて楚に逃る、

楚は春秋の時より、南方に據り中原と政治を異にせる爲めに權臣專橫の禍を免れたりしか、悼王は大に吳起に任し幸に權臣專橫の禍を免れたりしか、悼王は大に吳起に任し北、三晉を却け西、秦を伐ち其勢大に振へり、懷王の時に屈原と云ふものあり、其著す所の離騷の賦尤も後世に聞ゆ、衛、亦、孔伋を用ふ、伋字は子思、孔子の孫、家學を以て著はる

齊宣王稷下の士及孟子

馬陵の戰及申不害刑名の學

齊は先きに周安王の命を以て諸侯と爲りし以來、威王に至るまで他國の侵伐を免れさりしか、是に至り威王は子宣王に至り益、文學遊說の士を愛し騶衍、淳于髡、田駢、愼到の徒皆上大夫と爲る齊の稷下の士數百人の多きに至れり、然るに孟子至るも終に用ひられす、孟子名は軻、魯に生まれ幼にして慈母三遷の敎を被り、仁義道德の說を唱へ、後世孔子と並へ稱せらる、

此時、韓、魏相攻め戰已まさるを以て、宣王は孫臏をして魏を伐ち、其將龐涓の兵を馬陵（直隸省大名府元城縣）に破りて韓を救はしめたり、當時申不害と云ふもの刑名の學を以て、韓、昭侯に相と爲り、政敎大に修まれり、申不害に次きて刑名を以て名あるものを商鞅と爲す、商鞅は秦、孝公に相たり、

秦は周初より屢、西戎と戰ひ、尙武の習、性と爲り殊に四塞險要の地に居りしも、其西陲に僻在せるか爲め諸侯、皆、之を夷狄視して中原の會盟に與らしめさりしか、孝公に至り發憤して士を招き、衞人商鞅に任せり、商鞅法令を變し民をして什伍相糾察せしめ、又、軍功を賞し私鬪を禁し、井田を廢し、農を勸め賦を定め量衡を平にし、諸鄕聚を幷せて縣と爲し、宮を咸陽（陝西省西安府咸陽縣）に築き、之に都せしめ、其民を督するに嚴刑酷律を以てせしか、大に怨を國人に招き遂に其殺す所と爲れり、然れとも秦は之か爲め、益、爪牙を磨きて、其勢將に山東六國を呑まんとす、是に於て合縱連衡の策起るあり、

秦孝公

商鞅の變法

蘇秦の合縱

合縱連衡の策　秦國已に強く東方の諸侯、其兵に苦しみし時にあたりて、洛陽に蘇秦と云へるものあり、學に志し一日勤して曰く、士已に書を讀み自ら尊榮を取る能はされは多しと雖も亦、何ぞ爲さんと錐を以て股を刺し夜を徹して

學び秦に至るも惠王の用ふる所と爲らす去りて燕、文侯に說き、又、趙に至り肅侯に說きて曰く諸侯の卒は秦に十倍せり力を幷せ西に向はゞ秦必す破れん、大王の爲めに計るに、六國從親して秦を擯くるに如はあらじと、肅侯乃ち之に資して諸侯に說かしむ、蘇秦六國に歷說して從を約す秦大に之を恐れ一時兵を東方に出さゞりしか、公孫衍と云ふもの秦の爲めに從を破らんと謀り齊、魏共に趙を伐つに至り、蘇秦恐れて趙を去り、遂に合從の約解けたり、

張儀は魏人にて蘇秦と師を同しうす、嘗て楚に遊ひ辱めらる妻慍りて曰く子、讀書遊說する無くんは安そ此辱を得んやと、儀益、發憤して意を當時に注き、出てゝ秦、惠王に事へ、專ら横を爲し、六國を連ねて秦に事へしめ又、秦の兵を以て魏を伐ち已にして出てゝ魏の相と爲り其實大に秦の爲めに

計るなり其死するに及ひて連衡全く破れたり然れども秦は又、甘茂、樗里疾、樓緩等の徒交、出てゝ大に勢を張れり、

山東の形勢　連衡已に破れたる後、韓、魏は屬、秦に侵され獨り楚は之と盟約を結ひしかは韓、魏、齊は怒りて楚を伐てり後、又、齊、湣王は楚と和し宋を滅し其地を併せ屬、兵を燕に用ふ燕は子噲、位を其相、子之に讓り國大に亂れ齊の窺ふ所と爲りしか昭王立つに及ひて賢を招く天下の士爭ひて至り樂毅來り仕へ齊を伐ち七十餘城を下す齊、湣王は出てゝ莒（山東省青州府臨淄縣）に走る楚の將、淖齒、齊を救はんとして反りて湣王を殺し燕に應せしかは湣王の子襄王は卽墨（山東省萊州府卽墨縣）の人田單を推して將と爲す田單乃ち反間を燕に入れ樂毅を退け火牛を縱ち燕軍を破り失ひし所の七十餘城を復せり、

廉頗藺相如

當時趙、惠文王は廉頗、藺相如の二人を得て一時秦の辱を免れたり初め趙に卞和の璧あり秦、昭王欺きて之を取らんと欲せり相如秦に至り璧を完うして歸り後、又、王に從ひ秦に澠池(河南省河南澠池縣)に會して趙の威を示しゝかは趙王其功を稱し廉頗の上に位せしむ廉頗之を怨み相如を辱しめんとするも相如常に之を避け遂に刎頸の交を爲しゝと云ふ、

四公子及荀況公孫龍

是の時に當り、齊の孟嘗君は賓客亡人を養ひ、名を列國に見はせしか、趙に平原君、魏に信陵君、楚に春申君の出つるありて亦名を孟嘗君に齊くし、互に相傾け國勢反りて振ふこと能はさるに至れり、荀況、公孫龍、亦、此時を以て見はる、荀況は春申君に事へ、蘭陵(江蘇省常州府)令と爲れり、公孫龍は平原君に仕へ堅白同異の辯を以て名あり、

秦國の東侵

斯く燕、齊交、爭ひ列國、亦、振ふ能はさる時に

范雎白起

あたり、秦は益、諸侯の地を蠶食して止まさりしか昭襄王に至り范雎の遠交近攻の策を用ひ意を列國に注き、白起をして楚を伐ち、尋て又、韓を伐ち進みて趙を伐つ、時に趙の廉頗は長平(山西省澤州府高平縣)に軍するを以て、白起は反間を放ち、頗をして趙括と代らしめ、之を破り遂に其都、邯鄲を圍む、趙の平原君は毛遂等の徒を從へ、救を楚の春申君、及、魏、安釐王に求む、王は晋鄙をして之を救はしむ、然るに又、秦を恐れ新垣衍を趙に遣りて、秦を尊ひ帝と爲さんとせり、魯仲連、邯鄲に在り、衍に謂ひて曰く、彼の秦は禮義を棄て首功を尊ふの國なり、今肆に天下に帝たらは連、東海を蹈みて死せんのみと、後、信陵君は晋鄙を椎殺して其兵を奪ひ楚、趙と力を合せ邯鄲の圍を解けり、

魯仲連

邯鄲の圍

邯鄲の圍解く

然るに秦は之に屈せす、益、東進して已まさりしかは、周、赧王

周の滅亡

呂不韋

韓趙の滅亡

鄭國韓非

大に畏れ、一時諸侯と之を拒かんと謀りしも遂に秦、莊襄王の爲めに破られ、周全く亡ひたり、周は武王より此に至るまて凡、三十七世八百六十三年なり、

六國の滅亡　秦、莊襄王既に周を滅し尋て韓を侵し趙を攻む王死し太子政、年、尙、幼なるを以て呂不韋諸政を總攬し東方を侵畧す楚、趙、韓、魏、衞の五國合從して秦を侵しゝも皆、其破る所と爲る後、不韋死し政始めて事を秉るに及ひて楚人李斯の說を用ひ逐客の令を除き諸侯の君臣を間し然る後、韓、趙を亡滅せり、

是より先、鄭國と云ふもの韓の爲めに秦に來り間かに涇水（陝西省平涼府涇州）を鑿りしか事見はれて殺され韓非亦、韓の爲めに使して秦に來りしか李斯の爲めに讒殺せらる非は刑名法術の學を以て後世に著はる、

荊軻

燕齊楚魏の滅亡

斯く韓、趙已に滅ひ燕亦尋て亡ひたり初め燕の太子丹は秦に質と爲り辱を被り逃れ還りしか是に至りて荊軻をして秦に刺客たらしむ政大に怒り燕を滅し又、齊、楚、及、魏を平け百越の君を降し遂に天下を一統せり是を秦、始皇となす周の滅亡より此に至るまて凡、三十五年我、紀元四百四十年なり、

中世史

第一篇　秦漢

第一章　秦の盛衰

始皇の一統及郡縣の制

始皇の政治　始皇は襄祖以來の餘烈に由り六王の地を併呑したるを以て李斯の議を用ひ天下を三十六郡に分ち

又、自ら尊號を作り諡法を除き名城を墮ち兵器を銷し富者

李斯程邈蒙恬の發明

萬里の長城

儒者及詩書の燒殺

を咸陽に聚め宮殿を作り刑辟を重くし度量衡を等しくし車服文字を同しくし神仙を好み屢、巡行封禪して秦室の威を天下に示せり當時李斯は太史籀の大篆を損益して小篆を作り程邈亦、隷書を創め、蒙恬は毛筆を製したりと云ふ、初め秦昭王、趙武靈王、燕昭王は北地を拓き塞を築き郡縣を置きて胡人を拒きたりしか是に至りて始皇は蒙恬をして匈奴を伐ち益、塞を修築し臨洮（甘肅省鞏昌府岷州）より遼東（盛京省奉天府の南境錦州府の西境）に達す是を萬里の長城と稱す又、直道を作り南越を平け人民に人頭稅を課して其費に充つるに至る、是に於て秦の威遠く四方に及へり、然るに書生儒者は政法を非議せしかは、始皇怒り詩書を燒き、挾書の律を置き、儒生を坑にして古を學ふを禁し、已を議すること勿らしめたり始皇、崩し宦者趙高は始皇の長子扶蘇、及、將軍蒙恬を矯殺し少子胡

趙高專橫

郡雄蜂起
項羽沛公

秦の滅亡

亥を擁立す是を二世とす、

秦室の滅亡　二世の時、趙高は李斯を殺し宗族大臣を除き法刑賦斂を重くし又、二世の慾を恣にせしめ以て權を專らにせり是に於て陳勝、吳廣先つ亂を唱へ自ら陳王と稱す其將武臣、亦、趙に自立し田儋は齊に韓廣は韓に魏の公子咎は魏に懷王の孫、心は楚に王と爲り亦、懷王と稱し項梁、項羽等之を輔け、劉邦自立して沛公と爲り、蕭何、曹參之に屬し天下の豪傑一時に並ひ起れり、

己にして項羽は北進して秦兵を鉅鹿（直隸省順天府平鄕縣）に破り沛公は西進して嶢關（陝西省西安府藍田縣）より覇水（陝西省西安府の東）に至る是より先、趙高は二世を毒殺し二世の兄の子子嬰を立て反りて子嬰の爲めに族殺せられたりしか是に至り子嬰は沛公に降り秦三世十五年（紀元四百五年）を以てふ亡、

第二章　漢楚の交鬪

楚の分封

沛公已に咸陽に入り秦の宮室府庫を封し父老と法三章を約し秦の苛法を除き大に秦民の望を得たりしとき項羽は河北よりすゝみて咸陽に入らんとす沛公人をして函谷關（河南省陝州靈寶縣）を閉ぢ之を拒かしむ羽怒りて之を破り沛公を襲はんとして鴻門（陝西省西安府臨潼縣）に陣す沛公之を聞き來りて其事を謝す羽遂に兵を引き咸陽を屠り秦の降王子嬰を殺し宮殿圖書を燒き寶貨美女を收めて東し諸將を各地に封し沛公を漢王と爲し巴（四川省重慶府治）蜀（四川省成都府）漢中（陝西省漢中府）の三郡のみを與へ關中の地は秦の降將司馬欣、章邯、董翳に分封して漢の通路を塞かしむ是を三秦とす又、懷王を陽尊して義帝と爲し之を彬（湖南省湘州）に徙し遂に之を弑し

鴻門の會合

羽の分封及三秦

漢の三傑

楚漢の媾和

垓下の圍

羽の自刎

自ら彭城（江蘇省徐州府銅山縣）に都し西楚の覇王と稱し天下を制せり

楚の滅亡　初め義帝は諸將と約すらく先秦に入る者は關中に王たらんと然るに羽恣に分封せるを以て漢王大に之を怨み其義帝を弑するを責むるを名とし張良、蕭何、韓信の三傑及、曹參、陳平等の奇士雄將をして楚と睢水（河南省開封府歸德縣）滎陽（河南省開封府滎澤縣の西南）廣武（開封府滎澤縣の西）等に戰ひ楚の勢を挫かしめたりしかは、楚は漢と和を約すらく鴻溝（河南省開封府中牟縣）を界として天下を兩分せんと、然るに漢は愈、進みて羽を垓下（安徽省鳳陽府靈壁縣の南）に圍めり

羽四面の漢軍、皆、楚歌せるを聞き大に驚き歌ひて曰く力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何と遂に圍を潰りて烏江（安徽省和州の地）に至り自刎して死す羽

漢高の封建

年二十四を以て起り三年を歷て覇王と爲り漢と戰ふこと五年、年、實に三十一、漢王此に於て天子の位に即く是を漢高祖とす（紀元四百五十九年）

第三章　漢初の治亂

高祖の創業　高祖始め位に汜水（山東省曹州西南）の陽に即き洛陽に居りしか、婁敬、張良の勸に因り遂に都を長安（周の鎬京）に定む高祖は秦に損益して官制法令を修め又、賈人の衣絲乘車を禁し民をして錢を鑄さしめて秦の奢弊缺乏を救はしむ其功臣子弟を封するに至りては最も心を用ひ齊、楚に韓信、淮南に黥布、燕に盧綰、淮陽に彭越を置きたりしか後、反を謀るを名とし多く誅鋤して宗室子弟に與へたり蓋し周、秦二代の興亡に鑑みる所あれはなり

初め匈奴は秦の時、北に徙りしか漢、楚の亂に乘し南下の勢を以て帝の韓王信を伐つに當り大に帝を白登（山西省大同府大同縣の東）に圍む帝、陳平の奇計を以て僅に逃れ後、婁敬を遣し和親を結ひ齊、楚の富豪十餘萬人を關中に徙〳〵て匈奴に備へ又、關中の富を謀ると云ふ帝は斯く匈奴と和し天下を平けたるも猶四方を慮り歌を作りて曰く大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄉、安得猛士兮守四方、と遂に年五十三を以て崩し其子盈立つ是を惠帝とす

呂氏の廢立

呂氏の禍　當時帝の母、呂太后は戚夫人を囚へ趙王如意を殺したりしか惠帝崩するに及ひて後宮美人の子を取り少帝を立てゝ帝の嗣と爲し又、少帝を殺し恒山王義を立てゝ少帝と爲し朝に臨みて政を專にせり初め高祖は劉氏の外は王たるを許さゝりしか太后悉に劉氏宗族の地を削り

白登の圍及大風の歌

呂氏及齊王襄劉章

文帝及賈誼

て諸呂を王とし又、兵權を握らしめ〳〵かは呂產、呂祿の徒益、橫を極め遂に天下を奪はんとせり劉氏の宗族久しく之を憤りしか太后崩するに及ひ齊王襄は其弟、朱虛侯劉章、及、陳平、周勃等の諸將と謀りて諸呂を捕斬し其禍を平けたり然るに是より劉氏の諸侯王稍〻不遜に流れ遂に戰亂を極めたり是を七國の亂とす

七國の亂　諸呂既に滅ひ高祖の第三子文帝立つに及ひ內に治を務め外に匈奴と和し南越の趙佗を服し天下治を稱せり洛陽の賈誼年二十餘を以て上書して曰く方今天下の治安を欲せは諸侯の力を殺くに如くはなしと帝其言に從ひ之を弱めたり

然るに其子景帝の時に至り吳王濞は郡國の亡命を招き僭橫を極めしか帝は鼂錯の說を納れ其地を削らんとせしか

諸王の僭亂

は吳は膠西(山東省萊州府平度縣)膠東(山東省萊州府)菑川(山東省東昌府西南)濟南(山東省濟南府)及、楚、趙の六國と共に反を謀り勢甚た猖獗なり是に於て帝は袁盎の言に從ひ錯を誅し其故地を復するも兵、仍、解けさりしか周亞夫將として之を伐ち七國始めて平けり

諸王の抑制

是より帝は列侯を京師に留め國に就かしめすして之か權を奪ひ又、其子武帝に至り主父偃の說を用ひ諸王をして地を裂きて子弟を封するを許し痛く侯王の力を殺きたり

第四章　武宣二帝の治績

武帝の文治　初め秦に挾書の律を置きしより文學の道廢れしか高祖晩年儒學を崇ひ惠帝の時始めて挾書の律を除き其後、文、景二帝を歷て武帝に至り獻書の路を開き寫書の官を置き吏民の儒術に習ふものを徵し親ら賢良文學の士を策せしかは莊助、朱買臣、吾邱壽、司馬相如、東方朔、司馬遷、申培、河間獻王、董仲舒、孔安國の徒、經術、辭賦、文章の士續續出て稽古右文の功少からす太初曆を作り年號を置くも帝の世にあり

諸侯の彊出

武帝の北伐

武帝の武功　匈奴は曩に高祖を圍みしより屢、邊境を騷かしゝか是に至り上谷(直隸省宣化府)に入寇す帝は文、景、富庶の後を承けしを以て大擧して之か辱を雪かんと欲し李廣、衛青、程不識、霍去病、韓安國等の諸將をして二十餘年の間北伐して河南(內蒙古鄂爾多斯の地)を取り狼居(外蒙古にある山)を封し瀚海(大漠)に臨み之を窮追せしかは匈奴恐れ漢の天子は我、丈人の行なりと稱し漢使の降らさる者を還すに至る帝も亦、蘇武をして匈奴の使を送還せしむ匈奴、武を留めて之を降さんとす武

蘇武張騫

可かす匈奴に留まること十九年、後、宣帝の時に及ひて還れり張騫も亦、月氏（東南哈剌の境）に使し匈奴の獲る所と爲り留まること十三年漢節を失はす進んて大夏（バクトリア）等の西方諸國に至り還るに及ひて西南夷に通せんと請ひ因て玉門關（甘肅省安西州敦煌縣の西）を開く當時西南夷の著名なるものは月氏大夏の外に烏孫（チベット）大宛（カウカント）康居（サマルカント）安息（ペルシヤ）身毒等なり此等の諸國概ね使を遣はし來貢せさるなきに至る身毒は今日の印度國にて昔時釋迦牟尼の出てゝ佛教を開きしより後佛教大に中亞諸國に擴まり帝の時、霍去病の匈奴を伐つや、休屠金神を得て還るあり金神は蓋し佛像なり是を佛教東漸の濫觴と爲す漢威の絕域に及ふ此の如し是において東は朝鮮より南は夜郎（貴州省遵義府近傍）濱（雲南省の北部）等を以て郡と爲し漢の疆域始めて大なり又、倭人歲時を以て獻見せり

西南諸國及佛教の東漸

武帝の疆域及倭人の交通

と云ふ蓋し我、日本西陲土豪私に通するものならん

帝は斯く文勳武功あるも神仙迂怪の說を信し宦官を寵任し他日の亂階を作り民に爵を賣り白金を作り鹽鐵官、均輸法を設け商賈の利を奪ひ國内罷弊せしか末年外征の非を悔ひ輪臺（西域地名甘肅省宣化州に在）の屯田を罷め國本を復することを務めたり帝崩し其子昭帝立つ

武帝の晩年

霍光の輔佐　霍光は謹直正實を以て武帝の遺託を受け張安世、杜延年等と昭帝を輔け武帝の弊政を除きたりしか上官桀は霍氏と權を爭ひ其子安、及、蓋長公主、丁外人等と謀り霍光を除き燕王旦を立てんとせり時に帝は年十四ありしも既に其姦を知り桀等の黨を廢し益、霍氏に任せり帝崩し霍光は武帝の子昌邑王賀を立てたりしか其淫戲度無きか爲め復、之を廢し武帝の曾孫病已を立つ是を宣帝と爲す」

上官桀の禍及霍氏の廢立

霍氏の變

宣帝の中興

宣帝の治世　霍氏は昭帝以來定策の功を以て子弟、皆、顯官となりしか帝の時に及ひて光の妻顯氏は許后を毒殺し女を納れて后と爲す光之を知りて咎めさりしか其卒するに及ひ子、禹は帝を廢し自立せんとし事覺はれ霍后、及、其黨、皆、誅せられたり

帝是に於て政を親らし嘗て曰く民の田里に安して歎聲なき所以は政平に訟理れはなり我と此を共にするものは其れ唯、良二千石かと魏相、丙吉、于定國、趙廣漢、尹翁歸の徒交、出て刺史守相と爲り政大に治り天下號して中興の主と爲す然れとも宦官弘恭、石顯をして樞機を典らしめ外戚の許、史二家に任せし如きは後日の亂階をなすと謂ふへきなり

第五章　外戚の僭竊

蕭望之弘恭許史牢梁

朱雲劉向

王莽の篡弑

戚官の黨比　帝崩し其子元帝立つ蕭望之、周堪等遺詔を承け帝を輔けしめしか是に至り弘恭、石顯等は外家の許、史二氏及、牢梁、五鹿充宗等と黨友を結ひ蕭望之の徒を誅殺し已に倚附するものは寵位を與ふ斯く專横を極めしも帝之を制する能はす遂に外家王氏の僭竊を招くに至れり、

王氏の驕恣　帝初め王氏を以て后と爲しゝより其子成帝の時には王鳳、王商等の一族、皆、侯と爲り政を取り杜欽、谷永の徒を以て羽翼と爲し專横を極めたり張禹、宰相を以て王氏に諂ふ故の槐里、令朱雲、之を憤り禹を斬らんと請ふ劉向、亦、王氏の專政を慮り洪範五行傳を上り趙后、姉娣の淫亂を見て列女傳を作れり斯く朝廷は衰亂したりしも宗室諸王の勢微弱にして一人の朝廷を輔くるものあらさるなり、」

成帝の子哀帝を歷て平帝の時に至り王莽は外戚の親を以

て漢の本支倶に弱きに乘じ女を納れて后と爲し己に附かさるもの何式、鮑宣等數百人を誅斥し竟に帝を毒殺し宣帝の玄孫嬰を立てゝ孺子と稱し自ら政を攝し假皇帝と爲り又、孺子を廢せり漢は高祖より此に至るまで十二世二百十年（紀元六百六十八年）にして王莽に奪はれたり、

王莽の政略

新莽の僭亂　莽は夙に父王曼を喪ひ一門盛榮驕奢を極むる時に當り獨り學を好み謙讓を裝ひたりしか是に至りて帝位に昇り國を新と號し始建國と改元し文物制度悉く周禮に則り、井田を行ひ、名つけて王田と稱し、又、漢の諸侯王の爵を奪ひ、悉く宗屬を封して侯伯子男と爲し四夷王たるものを改めて侯と爲し匈奴單于を改めて降奴服于と爲し後、又、改めて恭奴と爲せり、是より先、龔勝と云ふものあり漢に仕へたりしか是に至り

龔勝揚雄

王莽之を召す勝の曰く吾、漢家の厚恩を受けたり豈一身を以て二姓に事へんやと遂に應せすして餓死せり揚雄、亦漢に仕へたりしか是に至り莽に仕へ其大夫と爲り劇秦美新の文を作り莽の功德を贊したり斯くて莽、內は怨を人民に結ひ外は好を匈奴、西域、高勾麗に失するに至りしかは更始、王郎、銅馬の諸賊莽を誅し漢室を再興するを名として起り漢の宗室劉秀年二十八を以て兄縯と兵を春陵（湖北省襄陽府棗陽縣）に擧け北進して河北を徇ふ其族劉玄亦春陵に起り進みて長安に入り莽を誅せり莽、帝と稱すること十五年、後、秀は王郎、銅馬の諸賊を平け漢祚を復し都を洛陽に定めたり是を光武帝と稱す（紀元六百八年）

王莽の滅亡

劉秀の興起

第六章　光武の中興

群雄の平定及光武の政略

光武の政治

帝即位の始は群雄、尚、各地に割據し赤眉は、長安に入り公孫述は蜀に據り隴西（甘肅省甘州府涼州府邊）には隗囂、河西（甘肅省蘭州治）には竇融等ありて皆、王と稱せしかは帝は鄧禹、馬援、吳漢、馮異、岑彭等の諸將を用ひ悉く平定せり其政を爲すや民租を寬うし奴婢を免し前代外戚の專横に懲りて之を抑制し又武臣を退け文吏を進め專ら尚書に委ね務めて文學を起し孝廉の士を擧け嚴光、周黨の處士を重んし前烈を恢復し且諸外蕃をも服屬せしめたり、

匈奴烏桓鮮卑及倭奴

外蕃の服屬

匈奴は王莽の時より屢、入寇し後、内亂して南匈奴、北匈奴とに分れしか是に至り悉く和親を求め烏桓（蒙古種内蒙古の東部）鮮卑（内蒙古科爾沁の右翼）于闐（和闐）疎勒（喀什噶爾）等の西北十六國來り通ず又、倭奴王の朝賀を嘉し印綬を與へしことありと云ふ、

馬援

明帝及班超

初め匈奴の入寇せしとき馬援は自ら請ひて往き擊たんとして其友に謂ひて曰く男子必す馬革を以て屍を裹みて還るへきのみと後、武陵（湖南省の西境）の蠻を征するとき帝其老いたるを憐み之か行を拒む援甲を被り馬上用ふへきを示す帝は斯く漢業を復し威を西北諸國に輝かし壽六十三を以て崩し其子明帝位に卽けり、

第七章　外夷の叛服

明帝一帝の治　明帝は光武の遺制を奉し大に文學を重んし政治を脩め耿秉、竇固をして北匈奴を伐ち班超をして西域に通せしめたり超は彪の子なり初め家貧しくして傭書したりしか偶、慨然筆を投し歎して曰く大丈夫功を異域に立て封侯を取るへし安そ筆墨の間に從事せんやと三十

一年の間武を西域に振ひたり
是より先、武帝は匈奴を伐ち休屠金神を獲て之を禮拜し佛道流通の始を爲し又、張騫は大夏に使ひし身毒國(印度)に浮圖の敎あるを知りしか是に至り帝は蔡愔を其國に遣はし佛經を寫し摩騰、法蘭の二沙門を以て還り梵經を譯さしめ白馬寺を立てたり
帝の子章帝は前朝苛察

（百將圖傳）

の弊を除き寬大を主とし又、文學を起し群儒を白虎觀に會し孔子を闕里(山東省兗州府曲阜縣)に祀り又、北匈奴五十八部を降し西域を攻め大に威を外夷に輝せり是を以て光武中興後の治は明、章、二帝の世にありと云ふ

和安二帝の世　章帝の子和帝の時、北匈奴叛きしかは外家の竇憲は嘗て罪を獲しか爲め匈奴を伐ち自ら贖はんとして大に之を破り燕然山(外蒙古塞因諾顏部の地)に登り班固をして功を石に勒せしめたり固は超の兄なり超は章帝の末年より西域を平けしか是に至り裏海の邊まて漢に服屬せしめ又、其徒甘英をして大秦に通せしめしも達せすして還りしか後(桓帝の時)大秦主安敦は海路より使聘を通したり帝崩し殤帝を歷て安帝の時に至り西域既に漢に絕ち北匈奴復、入寇す超の子班勇之を伐ち其武勳亦、父に續けり羌夷亦、屢、入寇せ

しか是に至り郡民を誘ひ三輔、漢中より武都(甘粛省蘭州府狄道縣)に出没跋扈するを以て虞詡は武都守となり大に羌の衆を敗れり斯く帝は外、羌衆を平くること雖も内、已に戚宦の交、專横するか爲め帝の子順帝以後は漢威大に衰へ四夷強梁を極むるに至れり

第八章　戚宦の禍

戚宦の廢立　初め明帝の后馬氏は克く光武の遺志を奉し外氏を抑損したりしか章帝の后竇氏は寵幸を得るに乘し帝に勸めて兄憲を中郎將に弟篤を黄門侍郎と爲さしめ和帝の時、憲大將軍と爲り其黨朝に充滿し遂に反を謀るに至る帝時に年十四密に宦官鄭衆と謀りて竇憲を誅せり宦豎專權の漸は實に此に啓けたり

其後、殤、安、三帝、亦、鄧太后、及、其兄の子鄧騭の擁立する所となり政權其手にありしか太后崩し安帝始めて政を親らにし鄧氏を斥け閻后は兄顯に任す此に於て閻氏恣に禁兵を掌り宦官江京、李閏等と互に相比黨して政を亂る帝の乳母王聖、其女伯榮は宦者樊豐と競ひて姦賂を通す後、孫程、王康等の宦者十九人は閻后兄弟の徒を誅し順帝を擁立して天下の大權其手に出つ梁冀、亦、外戚を以て大將軍と爲り沖、質二帝を歷て桓帝に至るまて皆、其擁立する所たり帝は宦官單超、徐璜等と謀り梁冀の黨を誅し超等五人を侯と爲すに是より滅家の威衰へ閹豎益、專横を極め士大夫を禁錮せり

黨人の禁錮　斯く單超等の諸宦官列侯と爲り其徒天下に跋扈する時に當り陳蕃、李膺等の氣節の士見はれ大に宦豎の專横を怒る又、朱穆、黄浮等の刺史は往、宦豎の罪を犯せ

黨人の初禁

るものを斬殺せしことありしかば宦者之を憤り李膺、陳蕃、賈彪、范滂等二百餘人を刑獄に下せり然るに竇等の獄辭多く宦者の子弟を引きしを以て宦官之を懼れ其徒を赦し田里に歸らしめて終身を禁錮したり

黨人の再禁

帝崩し靈帝立つに及ひ竇太后は帝の幼なるを以て父竇武と政を執り陳蕃、李膺、杜密の徒を朝に列し權宦曹節、王甫等を誅せんとせしか謀泄れ陳蕃、竇武、李膺、杜密、范滂の諸名士誅せらるゝもの六百餘人の多きに至れり然れとも士大夫、皆之を重んし其節を慕はさるはなし滂の收へらるゝや母訣して曰く今汝は李、杜と名を齊しうす死すとも亦、何の恨みあらんと郭泰之を慟して曰く詩に云ふ人之云亡邦國殄瘁すとて漢家の滅亡せんことを歎息せり

時に曹節死し其徒、張讓、趙忠等十人、皆、侯と爲り其子弟出て

黃巾の賊

て職を州郡に奉し人民を苦めしかは盜賊所在に蜂起せり鉅鹿（直隸省順德府及眞定府南境）の張角私かに宦者に通し衆數萬を擁し皆黃巾を著けて標識と爲し勢尤も猖獗なり是を黃巾の賊と云ふ初め高密（山東省萊州府高密縣治）の人鄭玄と云ふものあり嘗て盧植と馬融に師事したりしか是に至り賊、亦、其學德を重んし其鄉邑を抄掠せさるに至ると云ふ帝天下の黃巾に應せんを畏れ黨禁を解きたりしも內は尙、宦侍に制せられ外は群賊愈、峰起して海內大に爭擾せり

鄭玄

黨禁の解除

第九章　漢の末路

宦者の誅戮

董氏の變亂　靈帝崩し太子辯立つ是を廢帝と す母何大后朝に臨み太后の兄の子何進政に預る司隷校尉袁紹は進に勸め幷州牧董卓等を召し宦者張讓等を誅せしむ宦者之

を聞き進を殺す紹乃ち兵を勒し諸宦を捕へ少長となく之を殺すもの二千餘人の多きに至れり

董卓の廢立

卓來り帝の昏愚なるを以て之を廢し靈帝の子獻帝を立て權を恣にし遂に帝を長安に遷し漢祚を篡はんとせり後、

王允呂布

司徒王允は卓の僭横を惱り卓の愛將呂布と結託し遂に之を誅せしかは卓兵怒りて闕を犯し王允を殺し呂布を走らす帝出てゝ安邑(山西省解州夏縣)に逃れたり

諸雄の群起

初め關東の諸郡袁紹を推して盟主と爲し董卓を誅するを名とし起りしか是に至りて孫堅、公孫度、劉表の群雄並ひ起り海内愈、分裂せり曹操、亦、卓を討せんとして滎陽に戰ひ遂に兗州、牧と爲る荀彧、操に謂へらく晉文は襄王を納れて覇を定め漢高は義帝の喪を發して諸侯を得たり宜しく主上を奉して人望を收め天下を服すへしと操

遂に其言を用ひ獻帝を許(河南省許州府)に迎へ自ら相と爲り遂に自ら魏王と爲り銅雀臺を鄴(河南省彰德府)に作り子丕を以て王太子と爲し漢室を制し中原を定めたり

曹操の東下

劉備は大に之に抗するに至れり

赤壁の戰

吳は江東に據り孫堅、卓を討するを以て起り其子、孫策、孫權、皆、雄を以て聞えしか是に至り孫權は都を建業(江蘇省江寧府)に定め父の志を紹き周瑜、魯肅、黃蓋等の諸將を用ひ江東に雄視せり

孫權

曹操は既に劉表の子琮を荊州(湖北省荊州府治)に降し其餘威を以て東下して吳を擊たんとす吳人震恐して戰ふ意なし周瑜、魯肅、權に勸め大に曹操を赤壁(湖北省武昌府西北の江濱)の下に破りたり曹操歎して曰く子を生まは孫仲謀(權字の)の如くなるへし劉景升(表字の)か兒子は豚犬のみと魏兵是より南下せさりし

劉備

ものは二人の功あり而して劉備亦預りて大に力あり

劉備(字玄徳)は涿郡(直隷省順天府西南境)に起り自ら景帝の子中山靖王の後と稱し諸葛亮、關羽、張飛の諸名將其下に屬せり初め備は公孫瓚、袁紹、呂布、曹操、劉表の間に往來せしか曹操、吳を擊つに當り亮の言を容れて吳と力を合せ曹操を赤壁に破り進みて吳と荊州を爭ひ關羽をして之を守らしめたりしか

關羽の死

關羽の威、魏、吳の間に震ひしを以て魏は吳をして之を攻殺せしめたり劉備は已に自ら益州(四川省成都府治)に入り曹操の兵を漢中(陝西省漢中府)に破り自立して漢中王と爲り巴(四川省慶府治重)蜀

魏の篡立

(四川省成都府治)漢中の險を有し以て大に其根基を固くせり是の時、曹操は已に自ら魏王と爲り車服天子に擬したりしか其子丕に至り獻帝をして位を己に禪らしめ洛陽に都す是を魏文帝とす漢は光武中興より凡、十二世百九十六年(元紀

漢滅亡

八百八十年)にして滅ふ是より後、魏、吳、蜀鼎立して干戈を事とするを以て是を三國分立の世と稱す

第二編　三國及兩晉南北朝

第一章　三國の鼎立

三國の交戰

劉備は魏、文帝即位の翌年を以て帝と稱し都を成都(四川省成都府)に定む是を蜀昭烈とす昭烈は曩に吳と爭ひしとき關羽を喪ひしを憤り吳を伐ち進みて夷陵(湖北省宜城府治)に至り吳の將陸遜の爲めに破られ後、病を發し太子禪を諸葛亮に託し年六十三を以て崩す太子禪立つ是を後帝とす爲す

吳蜀の交爭

昭烈の遺託

南夷征伐

諸葛亮既に遺託を受け後帝を輔け官職法制を修め南夷を征し魏を伐ち力を中原に展へんとして出師の表を上り出

祁山の初戰

祁山の再戰

孫權の帝號

て、祁山（甘肅省鞏昌府西和州の地）を攻むる時に魏は文帝死し其子明帝立ちたりしか昭烈崩せし以來、復、蜀を慮らさりしも是に至り大に驚き張郃をして大兵を以て之を拒かしむ亮の將馬謖、其節度に違ひ魏の爲めに敗られ〳〵かは亮は使を吳に通し共に魏を伐ち天下を兩分せんことを約せり

吳の孫權は初め魏に通せしか後之と好を絶ち蜀に通し遼東の公孫淵に結ひ魏の後を制し又北征を試み屢、魏を苦めたりしか是に至り帝と稱せり是を吳の太帝と爲す

五丈原の戰　諸葛亮は魏に破られしより民を休め士を養ひたりしか是に至り大擧して兵を出たし復、魏兵を祁山に圍み其將張郃を破り魏の勢を挫き後、復、進みて五丈原（陝西省鳳翔府郡縣の西南）に屯田し戰を魏の將司馬懿に挑む懿、重を持し出てす亮、巾幗婦人の服を贈りて懿を辱め之を誘ふ然るに

諸葛亮の死

司馬懿の專恣

司馬懿の廢立

孔明肖像

（紫宸殿賢聖障子摸本）

懿遂に應せす亮年五十四を以て軍中に死す亮字は孔明忠貞誠實を以て後世に著はる

三國の滅亡

魏の明帝は諸葛亮の死せしより西邊慮るに足らさるを爲し司馬懿をして遼東、及、高勾麗を征服せしめり帝崩し司馬懿は帝芳に相こし威福を弄し遂に諸王を鄴（河南彰德府臨漳縣の西）に徙せり其子司馬師は帝を廢し高貴公を帝

蜀の滅亡

魏の滅亡

呉の滅亡

ご爲し僭横を極め遂に帝を弑し少帝を迎立し後、西の方蜀を伐てり諸葛亮死せし後國勢震はさりしか是に至り魏は鄧艾、鍾會の二將をして進みて蜀道の險要、劍閣(四川省保寧府劍州の東北)狄道(甘肅省蘭州府秋道縣)を陷るる是の時亮の子瞻、綿竹(四川省綿州德陽縣北)に防き其子尚ご慷慨戰死す鄧艾進みて成都に入る後帝遂に降る蜀、凡二世四十三年(紀元九百二十三年)にして亡へり

魏は司馬昭の子炎に至り魏帝に逼りて禪讓の事を行はしむ是を晋、武帝ご爲す魏、凡五世四十六年にして亡ふ(紀元九百二十五年)

是より先、呉は蜀、魏交、戰ひし時其將丁奉に命して沔(陝西省漢中府治)に向ひ蜀を救はしめたりしか内亂相續き鳥程侯皓の時に至り益、潘樂を擅にし國政衰ふるを以て晋、武帝は初め羊祜をして間隙を伺はしめ後、又、杜預、王濬等をして西陵(湖北荊州府夷陵)より進みて建業に入り呉を平けしめたり呉、凡四世五十二年にして亡ぶ是を我、紀元九百四十年の事ご爲す晋の魏に代はりしより年を歷るこご十六年にして海内始めて一統に歸せり、

武帝の初政並晩年の怠荒及五胡の亂階

第二章　西晋の隆替

武帝の政治　武帝は魏を簒ひて洛陽に都せしより務めて三國の弊政を除き羊祜、杜預の諸臣を用ひ又魏に鑑み宗室を藩屏ご爲し益、力を民事に盡し天下太平を想像したりしか呉を平けし後は日に怠荒に流れ遂に州郡の武備を罷め山濤の言を聞かす内郡の雜胡を邊地に徙すへきを縱して郭欽の疏を容れす又、匈奴の劉淵を以て北部の帥ご爲して并州(山西省太原府)に居らしめ胡人華を亂るの端を開き繼く

竹林の七賢

晉人の風俗

賈后及八王の亂

に孝惠帝の昏愚を以てして崩せり、

時に稽康は好みて老莊を云ひ阮籍、阮咸、山濤、向秀、王戎、劉伶等と竹林の七賢と稱し放達を事とせしか王澄、阮修、謝鯤、畢卓等の士太夫、皆、昏酣裸體して禮法の外に立つにあらされは浮文浮辭を弄し虛無清談を事とするの習益、起り漢末氣節の風大に變したり、

諸王の變亂　惠帝の后賈氏は帝の暗愚に乘し政權を握り楊太后を廢し楊駿、衞瓘等を殺し張華、裴頠を用ひ太子遹を毒殺して凶悍日に甚し是に於て汝南王亮、楚王遹は權を爭ひ趙王倫は賈后を殺して惠帝を逐ひ齊王國、成都王穎、河間王顒、長沙王人、東海王越等は朝廷を平くるを名として前後兵を擧け骨肉互に簒戮を事とせり、

斯く內には賈后、八王の亂あり外には胡人の隙を伺はんと

索靖

胡種及十六國

劉氏の侵寇

する恐れあるを以て關內侯索靖は洛陽宮門の銅駝を撫し歎して曰く汝か他日荊棘の中にあるを見んと惠帝は東海王越に鴆殺せられ其弟懷帝尋て立てり、

五胡の侵寇　初め漢、魏以來、羌、胡、鮮卑の降るものは之を塞內の諸郡に置きしか晉に至り中原半は夷人に屬し屢民害を爲せり是に至り諸王の內亂に乘し南北朝の始に至るの間、先後並起して江淮より以北に從橫するもの前趙（匈奴種、祖は劉淵）成（一に漢と云此種、李雄）後趙（石勒、羯）前涼（張茂、漢人）前燕（鮮卑、慕容皝）前秦（苻健、氐）後燕（慕容垂、鮮卑）後秦（姚萇、羌）西秦（乞伏乾歸、鮮卑）後涼（呂光、氐氏）南燕（慕容德、鮮卑）西涼（李暠、漢人）南涼（禿髮傉檀、鮮卑）北涼（沮渠蒙遜、匈奴）大夏（赫連勃勃、匈奴）北燕（馮跋、漢人）の十六國ありその中、匈奴、鮮卑、氐、羌、等の五胡尤も盛を極めたり、

初め劉淵は左國城（山西省汾州府永寧州の東北）に居り國を漢と號し尋て平陽（山西省平陽府臨汾縣）に都し帝を稱せしか是に至り其子聰は石

洛陽長安の沒落

勒を遣はし來りて許昌(河南省許州府)を攻めしむ時に晉の太傅越、檄を飛はし四方の兵を徵す一人の應するものなし越自ら兵を以ゐ石勒を防き軍中に死す石勒遂に許昌を陷れ大尉王衍を執へ進みて洛陽を陷れ懷帝を執へて平陽に送れり

琅琊睿王の即位

懷帝の姪秦王鄴長安に即位す是を愍帝と爲す愍帝、漢の劉曜の攻むる所と爲り平陽に送られ遂に弑せらる、時に司馬懿の曾孫、琅琊王睿は建業にあり帝の凶問を聞き位に即けり是を元帝と稱す晉初より此に至るまで五世五十二年(紀元九百十七年)是より後を東晉と爲す、

第三章　東晉の形勢

江東の內亂　長安既に陷り晉の中原は悉く胡人の蹂踐する所と爲り劉聰は已に河北を有し氐の李雄は蜀に入り

東晉初北部の形勢

國を成と號し拓跋祿官は上谷(直隸省宣化府)に鮮卑の慕容廆は大棘城(盛京省錦州府の西北)にあるを以て元帝は是に於て僅に江左半壁の地を保ち王導を引きて謀主と爲し顧榮、賀循、陶侃、庾亮、卞壼、其他、祖逖、劉琨等を用ひ前烈を恢復せんとせしも後、王導の族兄、王敦久しく不臣の志を蓄へ石頭城(江蘇省江寧府)に據りて反し之を服する能はさるを以て遂に敦を以て丞相と爲すに至るか如き未た嘗て志を中原に展ふる能はすして崩せり、

元帝の治

王敦の初叛

王敦の再叛

其子明帝の時王敦、復、姑熟(安徽省大平府當塗縣)に叛き晉祚を簒はんと謀る是に於て王導は庾亮、溫嶠の徒と謀り其病に乘し敦の兄王含の軍を破り其徒、錢鳳、沈充等を誅し漸く其亂を平けたりしか帝の子明帝の時に至り又蘇峻の亂起れり、

蘇峻の亂

成帝の時、王導等庾同しく政を輔く歷陽內史蘇峻反を謀り

姑熟を陷れ遂に帝を石頭城に遷す卞壼、桓彝の諸名將之に死せり溫嶠之を聞き侃を薦め征西將軍と爲し共に國難に赴く侃遂に峻の兵を破りて之を殺し其亂を平け江東一時無事なりしが成帝崩し其弟康帝即位の初に至り庾亮の弟冀始めて北伐し胡を滅す(を以て事とせり、)

江東の無事

北胡の形勢

漢の劉聰の子孫は已に衰へ族子劉曜、之を亡し長安に都せり是を前趙と爲す後、石勒之を滅し是を後趙とす已にして其子弘は勒の從子石虎の爲めに殺されたり虎は鄴(河南省彰德府臨漳縣)に都せしが冉閔の爲めに奪はれたり是を後魏と爲す冉閔、亦、慕容廆の孫、慕容儁の爲めに奪はれたり儁乃ち鄴に徙る是を前燕と稱す其他、成の李雄の族父壽は成都にありて國を漢と稱し拓跋祿官の孫、什翼健は代に張氏は涼洲にあり是を前涼と稱す氐の苻健は長安にて

北部の簒奪

泰と稱し國勢甚た張れり、

庾翼

東晉の北征

斯く北方の胡種簒奪を事として南下するの暇なかりしとき庾翼北伐を期せしも其志を達する能はずして死せしを以て桓溫遂に其志を紹けり溫豪放にして偉畧あり帝崩し其子穆帝の時に及ひて北伐して成都に入り漢を滅し其主李勢の首を建業に送り晉の威大に西北胡人の間に震へり、

桓溫漢を滅す

桓溫既に漢を滅し威權を恣にし帝の憚る所となりしが又兵を出し關中に入り秦を破る秦主健大に畏れ長安の小城を閉ぢて自ら守る王猛と云ふもの倜儻にして大志を抱き華陰(省西省同府)に隱れたりしが是に至り溫に見え蝨を捫りて當世の務を談す溫之を異とし徵せしも就かず後秦主健の弟堅に仕へて將と爲れり、

桓溫の入秦

王猛の倜儻

温成を洛陽に置く幷に枋頭の敗失

温の陰謀

温進みて秦兵と白鹿原（陝西省西安府城の東）に戰ひ糧乏しきを以て引き還る是より先、南安（甘粛省鞏昌府）の羌、姚氏の子襄、晉に降りしか是に至り叛きて燕に降り許昌に據り洛陽を攻むるを以て温、亦、進みて河に至り北、中原を望み歎して曰く神州を陸沈せしむる百年と遂に姚の兵を破り洛陽に入り成を置きて還る後、燕の慕容恪、洛陽を陷るゝに及ひて温、亦、之と戰ひ枋頭（直隸省大名府滑縣）に破れ威名大に墜ちたり、

大丈夫桓温北征の功を負ひ久しく不臣の志を蓄へ嘗て曰く大夫夫芳を百世に傳ふる能はされは當に臭を千歲に遺すへしと遂に帝奕を廢し元常の子文帝を歷て又、帝の不豫に臨み

桓玄の反

劉裕の北伐及簒立

五胡の亂晉と終始す

帝の子安帝の時に至り桓溫の子玄は帝の不慧なるに乘し反を謀る玄初め南郡(湖北省荊州府)公と爲り鬱鬱志を得ず歎して曰く父は九州の伯たり子は五湖の長たりと遂に反して建康に入り帝に迫り位を禪らしむ、

玄嘗て彭城(江蘇省徐州府銅山縣)の人劉裕を以て人傑と爲し大に畏れたりしか是に至り裕兵を京口(江蘇省鎭江府治)に起し玄を誅し帝をして復辟せしめ檀道濟、王鎭惡等をして北伐し洛陽を復せしめ自ら進みて後秦に入り之を滅し長安に留まり北方を經畧し還りて遂に帝を弑し其弟恭帝を立て又之に迫り其禪を受け建康に都す是を晉(宋)武帝と爲す、

東晉は元帝より是に至るまて凡、十一世一百四年(紀元千八十年)五胡の亂、亦、晉と同しく相終始せしか是に及ひて拓跋魏、北に興り天下二分して南北となる是を南北朝と爲す、

第四章　南北朝の分立

魏の長城及形勢

宋魏の交鬪　初め宋、高祖北伐して後秦を滅して歸り江左に君臨する時に當り夏主赫連勃勃、後秦に代り長安に都す又、拓跋魏主珪は都を平城(山西省大同府)に徙し帝を稱し長城を築き北狄柔然(蒙古の遊牧種)を防けり是を道武帝とす帝文學農業を盛にし士民をして髮を束ね帽を加へしめて夷狄の風を脫し國勢甚た振ひしか其子明元帝に至り宋の虎牢(河南開封府鄭州汜水縣)を拔き疆土を擴め其子太武帝は崔浩に任し夏を伐ち關、洛を取り涼、燕諸國を滅し南下して大に崔を伐たんとせり、

宋は武帝已に崩し文帝其後を承く魏の兵長驅して瓜步(江蘇

魏の長驅檀道濟

省江寧府合縣の東（六）に至る初め檀道濟讒を以て誅せらる其死に臨み幘を地に投して曰く汝か萬里の長城を壞ること魏人其死を聞き喜ひて曰く吳子輩復憚るに足らすこと是に至りて文帝石頭城に登り北望して歎すらく檀道濟若し在らは胡馬をして此に至らしめんやこと魏兵至る所を殘掠せしか遂に宋人の心を喪ひ引き還れり、

陶潛及謝靈運

是より先武帝の時宋陶潛の孫陶潛と云ふものあり清節詞藻を以て著はる帝の時に至り又謝玄の孫謝靈運と云ふ人あり好みて山に遊ふ帝其異志あるを聞き人をして之を收へしむ靈運詩を作り曰く韓亡（ヒテ）子房奮（ヒ）秦帝魯（タル）連恥（ッ）ぢ後、誅せられたり、

宋の滅亡

文帝より數傳して順帝に至るまて廢立篡亂の禍交起りしか順帝は其臣蕭道成の爲めに弑せらる道成立ちて天子と

なる是を齊高帝とす宋凡そ八世六十年（紀元千百三十九年）にして亡ふ、

東昏侯の淫亂及其滅亡

魏齊の治亂　齊は高帝より其子武帝より、二傳して明帝に至り猜忌を以てその宗室諸王を殘戮す尋て廢帝東昏侯嗣く亦昏淫狂恣なるを以て國内大に亂る南雍州刺史蕭衍叛き進みて建康を圍む齊人帝を弑し衍を迎ふ初め帝の弟寶融兵を江陵に起し即位して和帝と稱し亦東歸するに及はすして遂に梁人の弑する所と爲り衍是に至りて禪を受く是を梁武帝と爲す齊凡七世二十三年（紀元千百二年）にして滅ふ、

魏文帝の治

是より先魏は大武帝の後大帝に至り都を洛陽に徙し益政治に務め胡言を禁し胡服を改め江南の儒臣を引き文學を盛にし民に同姓相婚することを禁して大に内治を整へ又、

屢兵を齊に出しゝも齊の東昏侯の時に至りて崩し其子武帝に及ひて佞臣の制する所と爲り國勢漸く衰へたり、

梁武帝

梁魏の形勢　梁の武帝は齊に代り建康に都し儉素を以て下を率ひ最も文學を好みし又甚た佛を信し天竺の僧達摩と支を談せし事あり又魏文帝と淮を阻てゝ戰ひ其患を被ること少からさるを以て大に淮堰を築き之に備へたり、

魏の分裂

時に魏は武帝より數傳して孝武帝に至り權臣高歡の爲めに逼られ出てゝ長安に奔り宇文泰に賴る高歡亦文帝の孫靜帝を立て洛陽より鄴に徙る是を東魏と長安を西魏と稱す是より兩魏相戰ひ爭亂已む事無きか爲め梁は反りて四十餘年の無事を保ちたり、

然るに東魏の將侯景叛きて梁に歸するに及ひ梁は侯景を以て南豫州牧と爲し之を遇せしを以て東魏は侯景を得んと欲し一時和を梁に媾せり侯景之を恐れ梁を亂し武帝遂に餓死するに至る弟文帝亦侯景に制せられ遂に其弒する所と爲る既にして侯景亦始興大守陳覇先の爲めに殺されたり時に梁の州郡の大半は西魏に奪はれ蜀も亦魏の有と爲り唯巴陵（湖南省岳州府）より以下建康を以て限と爲すのみ、

梁の內亂

東魏の滅亡及北齊の興起

當時東魏は高歡の子洋丞相と爲り靜帝を弒し位に登る是を北齊と爲す西魏の宇文泰は已に孝武及其子文帝を弒し廢帝を立てたりしか是に及ひて亦之を弒し其弟恭帝を立て後梁元帝の時に及ひて其將于諱を遣し來り攻めて江陵（湖北省荊州府江陵縣）に入る帝自ら古今圖書十四萬卷を焚き歎して曰く書萬卷を讀むも猶今日あり遂に其攻殺する所と爲る西魏は梁王詧を江陵に徙し帝と稱し已に臣たらしむ是を後梁とす、

西魏の入寇及後梁の臣屬

梁及西魏の滅亡幷に周の興起

此時陳覇先は敬帝を歴て元帝の統を承けしめしか後、自ら九錫を加へ陳王と爲り梁の禪を受く是を陳の武帝と爲す梁、凡、四世五十六年（紀元千二百十七年）にして亡へり西魏は宇文泰卒し其子覺、恭帝の禪を受く是を後周の愍帝とす西魏、是に於て亡ひたり、

北齊の滅亡

齊周陳の存亡　北齊は高歡の子洋、簒奪以來其弟昭帝に至り漸く治に向ひしか成帝立つに及ひ佞人士開に任し益、淫樂を極め其子緯に至り後周、武帝の爲めに亡されたり、

後周の滅亡

後周は愍帝より明帝を歴て武帝に至り釋道を禁し淫祠を除き又能く士卒を訓練して北齊を滅しゝも其子宣帝は猜忌にして功臣を除き權を貪り其子靜帝に至り權臣楊堅政を秉り遂に帝を弑して祚を踐む是を隋、文帝と爲す、

是の時陳は後主煬公の時なりしか其祖武帝、文帝の時は儉

陳の後主及其滅亡

素を以て治に勤む其後、宣帝に至り北伐して後周の敗る所と爲り政寢、衰へしか是に至り後主は荒淫を事とし嬖姫佞小に任したり隋、文帝之を伐ち陳遂にその併する所と爲る

隋の興起

陳、凡、五世三十二年にして亡ひ隋始めて南北を平け天下、亦、一統に復したり是を我、紀元千二百四十九年の事と爲す、

南北の混一

第三篇　隋唐五代

第一章　隋の興亡

文帝及王通

文帝の肇基　隋、文帝天下を一統せしより專ら心を內治に用ひ租調を輕くし義倉を置き職田を給し文學を興し天下の遺書を求め民に兵器を持するを禁し南北朝以來殺伐の風を矯正し其他官制を設け刑法を寬め吏民の悅服する所と爲れり時に王通と云ふもの太平の策を上るも用ひら

れす退ひて河汾の間に教授せり帝性猜忌晩年功臣を誅除し又后獨孤氏の言を信し太子勇を廢し次子廣を以て之に代へしか遂に廣の爲めに弑せらる廣又兄勇を殺し遂に位に即けり是を煬帝とす

煬帝の偉略　煬帝は文帝富庶の後を承け豪奢を事とし内大に宮室を營み西苑を造り御道を設け長城を築き又刋溝を開き通濟渠永濟渠を鑿り江南河を穿ち涿郡(直隸省涿州)より餘杭(浙江省杭州府)に至る大工役を成せり是を後世運河又漕渠と稱す

煬帝の外征及外征　外屢大軍を出して南林邑を征し西吐谷渾(青海省古部蒙)を平け東南琉求を伐ち北匈奴突厥を服し詩を賦して曰く呼韓稽顙(シテ)至(リ)屠耆接踵(テ)來(ル)何如(シ)漢天子空上單于(シクル)臺(ニ)と又我日本國は小野妹子を遣はせして以て裴世清をして報聘せしめたり是を

日支使聘交通の始とす其他西域諸蕃と張掖(甘肅省甘州府張掖縣)に貿易を開き且諸蕃の京師に來るときは諸店肆に於て肆に飲食せしめたり然るに末年高勾麗を征して戰利あらす盜賊蜂起し郡雄各地に割據して天下復制すべからさるに至れり

隋家の滅亡　斯く天下麻の如く亂るゝ時にあたり煬帝荒淫益甚しく或は江都(江蘇省揚州府江都縣)に遊幸を事とせしかば天下大に怨みたり時に唐公李淵は太原(山西省太原)にありて突厥を防ぐ其次子世民隋の亂るゝを見て天下を安する志あり淵に說きて義兵を擧けしむ淵曰く家を破り軀を亡すも亦汝に由る家を化して國となすも亦汝に由ると遂に其謀を用ひ兵を以ね長安を陷れ文帝の孫侑帝を立て煬帝を上皇と爲し自ら唐王と爲れり

時に煬帝江都にあり中原の既に亂るを見て北に歸るの心なかりしか從駕の士宇文化及の爲めに弑せらる侑帝、亦、即位半年にして李淵に禪る是を唐、高祖とす隋三世三十三年にして亡ふ時に我、推古天皇の二十六年紀元千二百七十八年なり

煬帝の末路
隋の滅亡

群雄の平定

第二章　唐初の隆盛

高祖の統一　唐、高祖已に長安に都し天下に君臨せるも郡雄、尚、各地に割據して威令行はれさるか爲め世民をして西、薛仁果を滅し北、李軌、劉武周を平け其他、竇建德を服し王世充を降さしめ又、孝恭、李靖等に命し蕭銑を滅し江南を定めしめ七年にして一統の功成り都を長安に定め民と法十二條を約し悉く隋の苛禁を除きて治を謀りたり蓋し漢末より此に至るまて凡、四百餘年の間は均しく亂世たりしも高祖興るに及ひて天下統一に歸す其功世民預りて大に力あり

玄武門の變

貞觀の治　初め高祖は世民の功多きを以て儲嗣と爲さんと欲せしかは太子建成大に之を嘲み季弟元吉と世民を除かんことを謀る世民之を聞き建成、元吉を玄武門に殺せり高祖遂に位を世民に禪る是を太宗とす

太宗の治績　太宗は隋末より高祖を扶け天下を平けたりしか是に至り大に意を路治武備に注き官制を修め律令格式、及、租庸調の法を設け學校を開き科舉の制を更め房玄齡、杜如晦、魏徵、王珪等を重んし府兵屯戍の制を置きて武備を修めしかは四海大に治まり後世貞觀の治を慕ふに至れり

李靖李世勣侯君集

顔師古

僧玄奘

阿魯本

斯く内政既に擧かり外は李靖、李世勣、侯君集の諸將をして吐蕃、高昌、吐谷渾、高勾麗、西突厥等を征せしめ又自ら薛延陀（漠北）を征し大に威を外蕃に輝かし自ら雪恥酬百王除凶報千古の句を賦し顔師古に命し王會の圖を作らしめ其他、我、日本とも往來し又、僧玄奘をして印度に遣はし經論を譯述せしめて佛教を盛にし西僧阿魯本等を重んし斯波寺を（聖）建てゝ景教流行の始を作せり（賛像）初め突厥を征するや部落來り降るもの十餘萬口あり（賛徴曰く戎狄は人面獸心なり、若、之を中國に留めは必す心腹の疾を爲さん西晋の禍は

太宗肖像

（賛像賢）

太宗崩ず

唐初の疆域

太宗妃を入る

前事の明鑑なりと帝之を用ひす降虜を幽（直隷省順天府の北）靈（甘肅省寧夏州の境）諸州に置けり帝年十八を以て兵を擧け二十四にして功業成り二十九にして位に即き三十五にして太平を致し壽五十三（紀元千百九年）其子高宗位に即けり

高宗亦、能く帝の志を繼き西突厥を平け吐火羅（安西の北境）波斯（波斯の東北境）を服し又、新羅と力を併せ百濟、及、我、日本國の兵を破り遂に百濟を平け高勾麗を征し其疆域東は鴨綠江を過き西は温都斯山（安西の北境に在り）南は林邑（交趾）より北は骨利幹（露國塞尼斯科）に及へり是全く太宗武畧の餘烈たり然るに太宗は其弟元吉の妃楊氏を奪ひ盧江王瑗の妃を入れしか如きは當時識者の憂を免れさる所たり

第三章　武韋の禍

長孫無忌褚遂亮

武氏の專制

武氏の簒位

武氏の權數

武氏の僭竊　高宗即位の初は長孫無忌、褚遂亮等前代の遺託を受け扶翼して威を外域に輝かしゝも武氏后と爲るに及び天下其制する所と爲れり初め武氏は太宗の才人と爲り其崩せしとき感業寺に入り尼と爲る高宗其色を悦ひ髪を蓄へしめて後宮に入れ遂に王皇后を廢し蕭淑妃を殺し武氏を立てゝ后と爲しゝか武氏是より恣に王氏を殺し褚遂良を長け長孫無忌を殺し自ら朝に臨み政已に決せり帝崩し太子哲立つ是を中宗とす武氏、又之を廢し其弟豫王旦を立つ是を睿宗とす又、廢して皇嗣と爲し遂に唐の祚を奪ひ自ら神聖皇帝と稱し國を周と號す武氏唐を簒ひしより益、唐の宗室及已に服せさるものを殘戮し張易之、張昌宗等を嬖幸して淫悪を恣にせしも其人權數ありて能く人を用ひ魏元忠、婁師德、狄仁傑姚元崇の徒之か用を爲し政をし

て澁滯せしめさりしか其中、狄仁傑尤も信重せられ國老と稱して名いはさるに至る

武氏晩年其姪、武承嗣、及、武三思を立てんとするにあたり仁傑從容之を諫め遂に武氏をして中宗を復辟せしめたり武氏名は曌年二十四を以て尼と爲り六十七にして唐を簒ひ其周と號するもの十六年壽八十二（紀元千三百六十五年）を以て崩したり

韋氏の弑逆　初め中宗の武氏に廢徙せられて房州（湖北省隰陽府の南境）にあるや武氏の僭竊を憤り自殺せんと欲せしかは韋皇后之を止め屢、慰諭せしかは帝大に悦ひ韋后に誓ひて曰く幸に若、天日を見は惟、汝の欲する所のまゝにせんと是に至り韋氏、復、皇后と爲り朝政を預り聞くこと武氏の高宗の時に於けるか如し

帝の女安樂公主、武三思の子崇訓に適く三思是を以て宮中に出入し韋后に寵せらる韋后、又、散騎侍郎馬秦客を寵し帝の之を悟らんことを恐れ帝を毒弑し温王重茂を立つ是を殤帝とす睿帝の子臨淄王隆基之を怒り睿宗の妹大平公主及劉幽求等と謀り宮を襲ひ韋后、及、其黨を誅滅し殤帝を廢し睿宗を立て始めて宮闈の亂を掃蕩したり是を我紀元千三百七十年の事とす

韋氏及安樂公主の淫惡

隆基の匡復

宋璟姚崇

第四章　玄宗の政治

開元の治績　睿宗の時太平公主一時權を專にして太子隆基の英武を憚り之を易へんと欲せしか宋璟、姚元崇等の睿宗を感悟せし爲め事止み睿宗に代り立てり是を玄宗とす玄宗は宮中内亂の後を承けしを以て治に志し先、珠玉錦綉を殿前に焼きて倹素の風を養ひ宮を作り西を花萼相輝と名けて宗室友愛の意を示し南を勤政治本と稱して怠逸の心を戒め僧尼を沙汰し宮女を放還し姚、元崇、宋璟、韓休、張九齡等の先後、治を謀れり

玄宗の勵精

斯く内は賢相と謀り外は諸將をして吐蕃、回紇、契丹を征服せしめ又、新羅、大食、吐蕃の使者、及、我、藤原清河、安部仲麿等を優遇するか如きを以て大に内外の心を得開元の治は貞觀に比せり然れとも其宦官高力士を寵し三品將軍に除し張說の議を用ひ兵制を變じ且、節度使を置き邊疆を領せしめしか如きは他日の患を遺す少からす張說文に工に蘇頲と名を齊うす又、李白、杜甫は詩を以て當時に聞えたり

清河及仲麿

宦官の寵任及張說の議

蘇頲杜甫李白

安史の亂階　帝は開元の末年より稍、驕逸の意を生し九齡を斥け李林甫に任し又安祿山を愛せり祿山は營州（内濛古土

玄宗の怠逸

祿山思明

楊貴妃

李林甫

洛陽の陷落

(獸特)の胡にて幼より唐に逃れ來り性傾巧にして帝の意を得、營州(直隸省永平)都督より平盧(山東省青州府)及、范陽(直隸省順天府治)節度使と爲り遂に河北道採訪處置使に進みたり又、史窣と云ふものあり祿山と鄉里を同ふす亦、帝の愛する所と爲り名を史思明と賜へり

是より先、帝は其子壽王の妃楊氏を奪ひ之を貴妃と爲し其宗族兄弟を封して寵幸甚た至りしかは民間歌ひて曰く生ㇾ男勿ㇾ喜ㇾ女勿ㇾ悲ㇾ君今看ㇾ女作ㇾ門楣ㇾ と是に至り祿山入朝毎に貴妃に謁ひ禁闥に出入せり是の時李林甫政を專にし國用缺乏し武備廢弛已るを以て祿山大に叛亂の心を養ひたり

第五章　安史吐蕃の亂

祿山思明の叛

祿山已に朝廷弛廢の狀を知り范陽に叛し所部、及、胡人を以ゐて南し遂に洛陽を陷る時に李林甫死し貴妃の從祖兄楊國忠代りて政を秉り謀の出つる所を知らす帝是に於て驚歎して曰く河北二十四郡一人の義士無きかと已にして顏眞卿、義兵を平原(河北道に屬す山東省濟南府陵縣)に擧け其從兄杲卿は常山(直隸省正定府)に起り尋いて張巡、許遠の徒、江淮を守り之を防きしに賊勢益、盛に杲卿は賊將史思明の執る所と爲り祿山自ら大燕皇帝と稱せり

顏眞卿張巡許遠

祿山の僭號

是時、郭子儀、李光弼等賊と戰ひ河北を復せしも副元師哥舒翰は靈寶(陝西省今同)に戰ひて敗られ賊進て潼關(陝西省同州府華縣の東)に入る帝驚き出て馬嵬(陝西省西安府興平縣の西)に次す將士飢疲して憤り亂は楊氏一族に由ると殺して國忠を殺し貴妃を縊る是に於て帝は賊の猖獗に懲り禪位の意を太子璵に傳へて馬嵬を發し成都に赴き上皇と稱せり太子乃ち靈武(甘肅省靈州)に即

馬嵬の厄

肅宗即位

位す是を肅宗と爲す

祿山の死

時に祿山嬖妾の子を愛し長子慶緒を置きて嗣と爲さんとし遂に慶緒の爲めに殺さる慶緒父の兵を領し史思明等を

長安の恢復

して來り攻めしむ郭子儀回紇の援兵を借り大に賊を破り長安、及、洛陽を復す慶緒出てゝ鄴郡(河南省彰德府)を保す是に於て帝、及、上皇は始めて長安に還るを得たり

思明の僭號

慶緒は鄴郡を保しゝ後、久しからすして其將史思明の爲めに弑せられ思明、亦、范陽に僭號して大燕皇帝と稱し洛陽を

安史の亂平定

奮ひたりしか李光弼、馬璘等に敗られ遂に其子朝義に弑せらる後、肅宗の子代宗の時に及ひ其將固懷仙は朝義を殺して降服せしかは安史八年の戰亂是に至りて始めて平きたり是を我紀元千四百二十三年の事と爲す

吐蕃回紇の患

安史の內亂僅に平きたるも吐蕃は高宗

代宗の出奔

以來、吐谷渾等の諸羌を滅し其勢を強め內亂に乘し西邊より涇州(甘肅省平涼府徑州)を歷て長安に入る帝驚き陝州(河南省河南府)に奔る郭子儀疑兵を張りて之を拒き帝をして長安に還らしめたり

郭子儀吐蕃を退く

時に宦者程元振、魚朝恩等政治に參し兵權を專にし諸將の功あるものを中傷せるを以て郭子儀の將僕固懷恩、叛き回紇、吐蕃を誘ひ來る然るに懷恩途にして死し回紇、吐蕃、亦、睦しからさりしかは郭子儀回紇に說き唐と力を合せて吐蕃を伐たしめんとす吐蕃聞きて恐れ引き去れり然れとも西邊の地は唐の世を終ふるまて其患を免るゝこと能はさるなり

第六章　藩鎭の禍

藩鎮僭亂の由來

諸鎮の叛亂　斯く內には安史の禍あり外には吐蕃、回紇の亂ありて社稷日に衰微せる時に當り藩鎮の禍起れり初の玄宗の節度を邊疆に置き藩鎮と爲しゝより子孫世、其職を襲ひ來りしか代宗は安史內亂の後を承くるか故に賊の降將をして河北の諸鎮を領せしめ其子德宗の時に至り田悅、李正己、李寶臣等の諸鎮將河朔に僭して王と稱し淮西の李希烈南方にありて朝命に抗し遂に襄城（河南省開封縣）に寇せり、

德宗奉天に奔る

李晟渾瑊李懷光

德宗銳意之を征し前代の弊を除かんとして涇原節度使姚令言をして襄城を攻めしむ令言詔に應し長安に至り麾下の心を失ひしかは大尉朱泚其衆を奪ひ自ら大秦皇帝と稱し長安を亂せり帝爲めに奉天（陝西省乾州）に奔る泚亦來り犯す既にして李晟、渾瑊、李懷光等難に赴き其圍を解けり

盧杞

陸贄

德宗謝罪の詔

德宗梁州の出奔

是より先、盧杞相と爲り姦佞を以て帝に信重せられ忠良を傾陷せしか是に至り李懷光等の諸將交、其惡を責め亂の因る所と爲しゝかは帝已むを得す之を貶し又陸贄の勸により大赦を行ひ且天下に己の罪を謝して曰く天は上に譴むるも朕悟らす人は下に怨むも朕知らす亂階を馴致して九廟を震駭す其罪實に予にありと王武俊、田悅、李納等の諸鎮將感激して皆僭號を去れり、

陸贄肖像

（名賢傳像）

然るに李希烈、友、朱泚、の徒、尙、猖獗を極め李懷光、亦、叛き泚に應し來りて奉天を犯せしかは帝、亦、梁州（陝西省漢中府）に出奔せ

り李晟、孤軍を以ゐ朱泚、李懷光の二賊を平け帝をして長安に入らしむ是に於て朱泚は吐蕃に走らんことして殺され李懷光、朱泚、李希烈の輩、先後相死し其亂漸く平きたるも諸道藩鎭の勢は未た全く衰ふること能はさるなり、

楊炎の兩稅法

帝初め前代の罷弊を受け楊炎をして兩稅法を作り財政を修めしも內亂の爲め益、罷弊し且京師に還りし後は陸贄を斥け盧杞に任し李晟を疑ひ宦者竇文場の徒を寵任し姑息の政を以て終りしか其子順宗を歷て憲宗に至り政大に擧れり、

德宗の姑息

憲宗の剛明

憲宗の平鎭

憲宗、剛明果敢の資を以て前代姑息の餘弊を受けしかは杜黃裳、裴度等の諸名相を用ひ政治に務めて諸鎭を抑制せり會、淮西の吳元濟縱に兵を放ち侵掠して東方に及ひしかは帝之を怒り裴度に任し淮西、招討使こして

諸軍を進めしむ會、李晟の子李愬は賊將李祐を擒にして其謀を用ひ雪夜に乘し蔡州（河南省安寧府治）城に入り元濟を擒にし淮西を平定せり是より北方の强鎭悍將其威に畏れ朝廷に歸服し前代六十餘年の大患始めて一洗せり柳宗元、雅表を上り韓愈、詔を奉し其事を石に勒す二子皆文章を以て當時に著はる、

淮西の征伐

柳宗元韓愈

諸鎭平服の後、帝は宦者皇甫鎛、程昇の徒を相こ爲し仙を好み方士柳泌を以て刺史こ爲し中使を遣はし佛骨を迎へて禁中に留め方士の金丹を服し躁怒して屢、左右宦官を罪せしか遂に宦豎陳宏志の弑する所こなり其徒王守澄は太子恒を擁立せり是を穆宗こす時に我紀元千四百八十一年嵯峨天皇弘仁十二年かり我、橘逸勢、僧空海、高階遠成等久しく唐に在りしか此頃を以て歸朝したり又、天皇の廢太子高岳

憲宗の晚年

逸勢空海及眞如

親王は戒を空海に受け眞如と稱し唐より西域に入り給ひしと云ふ、

第七章　宦官の患及牛李の黨

穆敬二帝の

宦官の驕恣　穆宗は前朝の仇を忘れ宦賢に任し亦、方士を信し遊宴を事とせしかは朱克融、王庭湊、史憲誠等は各其將節度使を殺し亂を河朔に作し自立を謀りしも朝廷制すること能はす其子敬宗、亦、遊幸を事とし群小を昵近し性褊急動もすれは宦官を撻つ宦官劉克明之を怒り帝を弑し其徒王守澄穆宗の子絳王悟を迎立す是を文宗とす、

甘露の變

仇士良

文宗治を爲さんと欲し宋申錫、李訓、鄭注等と屢、宦官を除かんとす李訓一日故らに使をして奏、せしむらく左金吾廳の中庭後に石榴あり甘露之に降ると帝、先、宦者仇士良をして

仇士良

牛李朋黨の由來

其徒を以ゐて往きて見しむ李訓等兵を伏せて俟つ然るに謀泄れ諸閹は左右神策軍をして李訓、鄭注の徒數千人を誅殺せしめたり斯く諸閹の驕恣なる時に當り朝臣亦部黨を構へ互に相傾排するものあり是を牛李の朋黨とす、

牛李の朋黨　是より先、穆宗の時李德裕と云ふもの李宗閔の爲めに其父吉甫の制策に對して譏られしより宗閔、及、其徒牛僧孺等を構貶して互に朋黨を作りしか帝の時に至り宗閔は閹豎の助を得、牛僧孺と並ひ相とゐりて德裕の黨を排擯し尋て德裕を朝より斥け西川（甘肅省平涼府固原州の地）を鎭せしむ德裕因て籌邊樓を作り南は南詔より西は吐蕃に至る邊事を議し士卒を練習して之に備へしかは吐蕃の將悉怛謀恐れ維州（四川省成都府治）を以て來降す德裕維州を得るを以て極めて朝廷の便利とゐとし僧孺之を不可とゐとし維州を吐蕃

牛李の擠排

に歸し悉怛謀を慘殺す是より牛李の怨愈深く二黨互に朝廷に擠排して其禍解くへからさる勢あるを以て帝毎に歎すらく北河の賊を去るは易し朝廷の黨を去るは難しと帝崩して宦者仇子良等穆宗の子顓王湲を立つ是を武宗とす

武宗の初政

武宗前代の弊を匡復せんと志し李德裕に任し河朔の藩鎭を平けしめ又能く奄寺仇子良を制し漸く其黨を去れり然れとも晩年仙を好み望仙館を築き道士趙歸眞の徒を寵し

武宗の晩節

晩節振ふ能はすして崩せり是に於て宦官馬元贄等憲宗の子光王怡を立つ是を宣宗とす

宣宗の治蹟

宣宗は李德裕及ひ牛僧孺李宗閔等を斥け漸く牛李朋黨の患を去り刺史を黜陟して地方に力を致し然るに韋澳令狐綯等と謀り宦侍の權勢を殺かんとして反りて南北司の凌

南北司の凌轢

轢を構へ益宦者をして跋扈せしめたり帝崩し其子漼亦閹

南詔の入寇

豎王宗實の爲めに擁立せられ是を懿宗とす是より後內憂外患益起り天下復制すへからさるに至れり

黃巢の亂

第八章　唐の末路

海內の紛亂　懿宗卽位の初にありて裘甫は浙東に起り龐勛は徐州（山東省除州）に起り南詔は播（貴州省義府）邕（廣西省南寧府）交趾を陷れ天下大に亂れたりしか沙陀（伊犂邊の部族）の朱邪赤心之を平く帝姓名を李國昌と賜ひ大同軍節度使と爲せり斯く海內爭擾の時に際し帝は佛骨を迎へ宦寺に任して崩し其子僖宗亦宦寺の擁立する所となり日に遊戲を事とせしかは黃巢の賊之に乘し益猖獗を極め長安を陷る宦者田令孜帝を擁し蜀に逃る巢僭號して大齊皇帝と稱す當時李國昌の子李克用蔚州兵馬使を以て聞えたりしか是に至

朱全忠

朝廷の召に應し長安を復し黄巢の賊を平け帝をして長安に還るを得せしめたり時の巢の將朱温降る朝廷名を全忠と賜ひ宣武節度使と爲せり、

田令孜の專權

宦者田令孜は嘗て帝をして蜀に避けしめし功を負み專にし將を遣はし河中節度使王重榮を伐つ重榮屢に自立して亂を作すを以てなり重榮救を克用に求む克用朝廷の全忠を寵するを怨み令孜等は全忠と相結ひ己を謀るとて重榮に應し長安を騷かす令孜帝を劫し鳳翔(陝西省鳳翔府)に奔る既にして帝は令孜を流し長安に還りて崩す宦者其弟傑を立つ是を昭宗とす昭宗鋭氣前烈を恢復するの志ありしも内に宦寺の憂あり外に強鎭の禍あるを以て勢亦之を如何ともする能はす其中鳳翔の李茂貞華州(陝西省華州)の韓建華州(同上)の王行瑜を以て尤も強梁と爲す三鎭近畿に居り

三鎭の來犯

屢來りて長安を犯し廢立を謀る李克用先邠州を攻め行瑜を斬り近畿を治め自ら晉王と爲り兵を引き晉陽(山西省平凉府)に還る後茂貞復長安を犯す帝出て、華州に奔り韓建に依れり然るに韓建は朱全忠の洛陽に營し駕を迎ふと聞き之を恐れ帝をして長安に還らしめたり、

宦者の誅戮

既にして宦官劉季述等は帝を幽し權を專にせしか其徒韓全誨は朱全忠の來り攻むるを聞き帝を挾み鳳翔に如き李茂貞に依れり茂貞遂に全誨を殺し帝をして長安に還らしめ款を全忠に通す全忠亦兵を以ゐて宦者を驅り盡く之を殺せり蓋し文宗以來廢置は皆閹豎の手にありしか是に至り悉く誅滅せられたり全忠爵を梁王に進め汴(河南省開封府開封縣)に還りたり、

唐室の滅亡　全忠の威已に天下に震ひ益簒奪の謀を爲

し遂に帝に逼り都を洛陽に遷し之を弑す其子哀帝の時に及ひ全忠相國となり亦之を弑し位を簒へり是を梁太祖と唐の滅亡
す唐高祖より是に至るまて凡二十世二百九十年（紀元千五百六十七年）を以て滅ひたり是より藩鎮益勢力を有し兵士暴横を極め己の好む所に從ふて天子を廢立せるか爲め梁唐晉漢周の五代交興亡せしを以て是を五代と稱す

第九章　五代の更迭

梁室の存亡　梁太祖即位の時は天下分裂して吳に楊行密あり蜀に王建あり錢鏐は杭州（浙江省杭州府）にありて吳越王と稱し馬殷は潭州（湖南省潭州府）に楚王と稱し劉隱は廣州（廣東省廣州府）に南漢王と稱し燕に劉仁恭閩（福建省福州府）に王審知あり其他李克用は晉にありて尤も強大を極めたり斯く強雄分據せるを

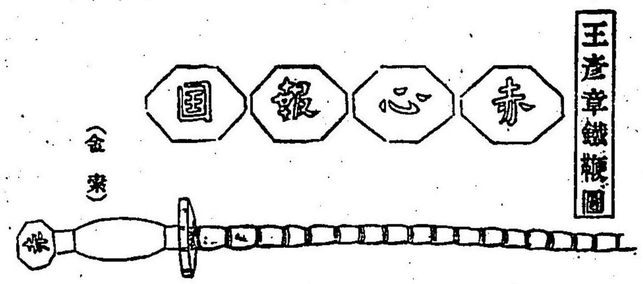
強雄の分據及梁の封疆

李克用

存勗

王彥章の忠

以て梁の疆域は僅に黃河の兩岸一帶の地を有するに過きさりしのみ然るに晉の李克用は屢梁と河北の地を爭ひたりしかし克用死し其子存勗年十七を以て晉王の位に即き遂に燕を滅し北方を幷せ大擧して梁に入寇せり梁は太祖既に崩し其子末帝の時なりしか晉主存勗は其將李嗣源をして進みて鄆州（山東省泰安府）を襲ひ取らしめしかは梁は王彥章を以て晉兵に向はしむ彥章戰ふ毎に二の鐵槍を用ふ軍中呼ひて王鐵槍と云ふ彥章屢晉軍と戰ひ功を立てしか是に及ひて遂に其檎にする所と爲る存勗其材を惜みこれを用ひんとす彥章歎して曰く豹



梁の滅亡

莊宗の荒逸及明宗の善政

唐の滅亡

は死して皮を留め人は死して名を留む吾朝に梁の恩を受け暮に晋に仕へは何の面目ありて人に見えんやと遂に其殺す所と爲れり存勗梁を滅し軍士の推す所と爲り帝位に即き洛陽に都し國を唐と號せり是を唐莊宗と爲す梁凡二世十七年（紀元千五百八十三年）にして亡ひたり

唐晋の存亡　莊宗梁を亡し後内嬖に惑ひ伶人に溺れ荒逸なりしかは軍士は李克用の養子李嗣源を擁し洛陽に逼る莊宗出て伶人郭從謙に弑せらる嗣源帝位に即き頗る善政多し是を明宗とす其子閔帝を歷て潞王に至り河東節度使石敬瑭に滅さる是を晋高祖とす唐凡四主十七年（紀元百九十六年）なり

晋高祖石敬瑭は唐明宗の女婿なりしか末帝の時異圖を抱き契丹に臣事し事ならば地を割かんと約し其援を得て唐

契丹の撥兵

契丹

契丹の改號及晋の滅亡

を破り之に代り洛に都し遂に汴に遷り契丹に歲幣三十萬を貢し雁門（山西省朔平府）以北の十六州を與へたり

契丹は東胡種にて唐の時より入寇せしか是に至り其主阿保機臨潢（內蒙古巴倫旗の東北）に城き帝と稱し契丹字を製せり是を太祖とす太祖嘗て晋王李克用と共に梁を滅さんことを約し後約に背きて晋に臣事し共に晋を破る克用死に臨み莊宗に囑するに必す契丹を滅さんことを以てせり莊宗遺志を承け之を破りしも契丹已に雁門以北の地を所有し幽州（直隸省順天府の北）を以て燕京と爲し國號を遼と改め百官制度皆中國に擬し高祖の世を終ふるまて來侵せさりしか其子出帝の時に及ひて晋の不遜を憤りて入寇し帝及皇后を捕へて晋を滅し所在を侵掠す中外怨憤之を逐はんことせしかは契丹其治め難きを知り遂に引き去れり是に於て河東節度使

漢の興起

劉知遠は其將郭威等の勸めにより汴に入り天子と爲る是を漢、高祖とす晉、凡二世十二年（紀元千六百六年）にして滅ふ

南唐の雄視

漢周の存亡　漢、高祖劉知遠、即位の時にあたり孟知祥は成都に據り後蜀を立て李冕は吳に代り南唐と稱し尋て閩を滅して江南に雄峙せり其子隱帝の時に至り鄴、郡留守郭威は高祖の遺託を受け輔佐せしも隱帝讒を信し毎に郭威を疎んず威怒り大兵を以ゐ使り侵す隱帝遂に亂兵の擁する所と爲る時に會、契丹の入寇ありしか威之を澶州（直隸省大名府開州）に禦き遂に將士に推されて漢に代る是を周太祖とす漢、凡二世四年（紀元千六百十年）を以て滅ひたり

漢の滅亡及周の興起

北漢

周、太祖即位の初に當り漢の宗族劉崇は帝を晉陽に稱し其子承鈞を遣はし周を伐ち戰破れ師を契丹に乞へり是を北漢と稱す既にして太祖崩し世宗立つに及ひて北漢復來寇せしかは世宗之を破り後蜀を攻む後蜀此に於て北漢、南唐に通し周を攻めんとす世宗、先、後蜀を破り又、南唐を服し威を南北に振ひ尋て契丹を伐ち關南（瓦橋關直隸保定府治）以北の地を取り途に疾み還り崩せり世宗英明武斷五代の英主と爲す」

世宗の英武

趙匡胤擁立

其子恭帝七歲にして位に卽く會、契丹入寇せしかは趙匡胤は歸德（河南省歸德府）節度使と爲り出て、之を拒き陳橋驛（河南省開封府城の東）に至り軍士の擁する所と爲り汴に還り遂に周の禪を受く是を宋、太祖とす是より先、馮道と云ふものあり、唐、晉、遼、漢、周の五朝に歷事し自ら慙つる所あきのみならす、時人、亦其榮遇を羨慕するに至りしか周の滅亡に先ちて死したり、周は三世十年にして亡ふ我、紀元千六百二十年なり

馮道

周の滅亡

第四篇　宋

第一章　宋初の隆替

太祖の政略

宋室の統一　宋の太祖、汴京（河南省河南府開封府開封縣）に卽位の初は北漢、後蜀、南唐、吳越、湖南、荊南等互に强峙し周の藩鎭未た盡く服屬せす兵士益、暴橫を極めて止まさりしかは太祖、大に之を憂ひ宰相趙普の謀を用ひ禁衞の士、石守信、王審琦、鳳翔節度使王彦超等の兵權を（聖）（賢）杯酒の間に奪ひ遂に文臣を以て州郡を知せしめ節鎭、所（圖）領の支郡に至るまて朝廷、皆之を直轄し諸州の驍勇を選ひて禁軍を補ひ禁軍をして

東南諸國の平定

北漢不服の原因

太祖契丹征伐の策略

邊域を戍らしめ又、諸州の大辟は刑部に付し覆視せしめ以て人命至重の意を天下に示し屢、國子に幸して遺書を天下に求め大に力を儒教に致し唐季以來、武斷暴橫の政弊を一洗せし如きは其政略の一班を伺ふに足れり

斯くて良將をして西北邊疆を守らしめ又、專ら力を東南諸國に用ひ荊南、湖南、南漢等を降服し曹彬、潘美、王全彬等に命して南唐、後蜀等を征せしめ諸降王を優遇し女眞、回鶻、于闐等の諸外國をして入貢せしめたるを以て邊塞の民、今日始めて太平の天子を見るこの言を發するに至れり然るに獨り北漢の太原（山西省太原府）に據り來服せさるあり蓋し契丹（遼）之か後援を爲せはなり初め太祖の、荊、湖、後蜀を平くるや其獲し所の金帛を內庫に儲へ封椿こ號せり是蓋し契丹を伐たんこの計畫に出てしものなり然れこも竟に其意を達する

に至らす在位十六年壽五十六にして崩せり然るに其弟太宗に至り前代の遺志を紹き北漢を征し吳越を服し海內全く一統に歸せり太祖建國より是に至るまて二十年、我紀元千六百三十九年圓融天皇天元二年の事とす帝の世、我東大寺の增脩然と云ふもの帝に見え我國祚の遐久にして文武の臣世襲なる事を說き帝をして大に景慕せしめたり

太宗北漢征伐

增脩然の謁見

契丹の戰和　帝は北漢を滅せし餘威を以て契丹を親征し尋いて曹彬、潘美の諸將之を伐ち大に岐溝關（直隸省順天府涿州の西南）に戰しも皆其破る所と爲り朔方の地を失ひて還れり是より契丹大に宋を輕んし太宗の弟、眞宗の時に至り進んて冀州（直隸省眞定府冀州）に逼り遂に澶州（一に澶淵と云ふ直隸省大名府開州）に至りしかは宰相寇準は帝を奉して河を渡り之を破る契丹大に恐れ退き和を媾し周の世宗の取りし所の關南（瓦橋關の南直隸省保定府治）の地を得んと請ふ、帝其地を與ふるを欲せす金帛を贈らんとせしかは寇準諫めて曰く契丹をして宋に臣を稱し、且其年も無事ならん然らされは數十年の後に戎心を生せんと得し所の幽、薊十六州の地を獻せしめんのみ此の如くは百然るに帝之を聽かす遂に和を媾し宋を兄とし契丹を弟とし稱し且、宋より每歲、銀絹を贈ることを盟約し各、兵を解て去れり是を澶州の盟と云ふ帝崩し仁宗の世、契丹、亦、關南の地を要求せしを以て富弼、契丹に行き遂に銀絹の數を增加し和好を修めて還れり契丹のかく要求せしは蓋し西夏の聲隙に乘すれはなり

太宗契丹の親征

眞宗の親征及寇準の軍令

契丹の入寇

澶淵の盟約

仁宗の朝契丹の要求

西夏の關係　西夏は唐の時より夏州（陝西省延安府夏州）に據り宋に及びて契丹、宋朝に兩屬したりしか是に至り其主趙元昊、自ら蕃書を制して國人を導き兵法を以て所部を屬し近隣

西夏の來寇

の地を略し興慶(甘肅省寧夏府)に都し大夏皇帝と稱し屢西陲に來寇せり帝之を憂ひ狄青、夏竦、范雍、韓琦、范仲淹等の諸將を～て交之を防かしむ後、夏人、渭州(陝西省平涼府)に寇するとき更に府を涇州(陝西省涇州)に設け屯兵を增し韓琦、范仲淹をして守備せしむ二人の恩威大に邊陲に行はれ元昊、遂に來り款を納る帝封して夏國王と爲し又、銀絹茶綵の歲聘を約し國境を定めたり當時西夏は隆盛の時にして其版圖、甘肅、陝西の地を有し北は回鶻より東は宋及、契丹を壓したり

韓琦范仲淹

西夏の版圖

慶后の議

朝臣の朋黨　宋既に好を契丹、西夏に修め外、安しと雖も內、已に朝臣の軋轢せるあり初め皇后郭氏帝に勸めて宰相呂夷簡を斥けしめしかば夷簡、復、相たるに及ひて帝に勸めて郭后を廢せしめたりしかは范仲淹、孔道輔等、交、夷簡を責め之を斥け王素、歐陽修等をして諫院の職に充て韓琦、范仲淹等をして樞密副使と爲し又、夏竦を以て樞密使と爲せしかは諫官論して夏竦を斥け杜衍を以て之に代らしむ夏竦、其黨益、軋轢するを以て歐陽修、司馬光等、疏を上り大に時弊を痛論せしも朝政振ふこと能はす帝崩し太宗の曾孫濮王允讓の子立つ是を英宗とす當時濮王崇奉の議起り朝臣亦互に排軋したり帝在位四年を以て崩し太子頊立つ是を神宗とす

朝臣の排擊

濮王の議

第二章　神宗の政略

神宗の希望　安石の新法　神宗雄偉の資を以て太祖の遺志を紹き契丹を伐たんと欲し大に王安石に任せり其意蓋し財を儲へ兵を養ひ四夷を攘ひ前烈を恢張せんとするにあり安石帝

制置三司條例司

新法の實施

に見え財政の策を述へしかは帝深く之を納れ遂に制置三司條例司を設け新法を行はしむ新法とは先つ農田の水利賦役を察して遺利を求め賣鹽場を陝西に置き均輸法を江南に行ひ青苗法を諸路に施し民に貸すに錢を以てし息二分を出さしめて春散し秋斂めんとす條例司屬蘇轍諫めて曰く錢を民に貸さば吏緣て姦を爲し錢民の手に入れは良民と雖も妄用を免れす其錢を納れ還さんとするに及ひては富民と雖も違限を免れすと安石聽かす吏を各路に遣はし多散を以て功と爲し戸等の高下に隨ふて品配し且民の逋負を恐れ必す貧富互に保せしむるに至る其他免役、市役、方田、均稅、保甲、保馬等の法を行ひたり其意蓋し利權を上に收めんとするにあり

是に於て范純仁、文彥博、呂公著等の朝臣、及、在野の士に至る

朝臣の廢黜

鄭俠曹太后

蘇轍の貶黜

まて交ゝ新制を議し安石を誹譏して止まさりしも安石政を執ること六年其間、已に逆ふものを斥けしかは老成忠言の士は大抵廢黜し盡くしたり會歲、大に旱し東北の流民、京城に浪散し來りしかは安上門の門監鄭俠と云ふもの其狀を繪き密かに帝に上り天災は安石の變法に因ると論し曹太后も民間の青苗、免役の法を苦むことを帝に論しけれは安石自ら安せす其徒、韓絳、惠卿等を朝に薦めて位を去れり後、復た入りて相たりしも僅か二年にして病を以て去り其徒、蔡確、王珪等繼きて相たり蘇轍の兄蘇軾と云ふもの詩を賦し時務を譏りしかは王珪等の爲めに貶黜せらる蘇轍、司馬光等二十餘人之を救ふに坐して亦、廢貶せらる帝、軾を憐み復、用ひんとせしも蔡確等の沮む所と爲れり軾は洵の子、文に長す洵は年二十七にして始めて學に志ゝ後、其二子軾、轍

と共に知を歐陽修に受け蘇氏の文名始めて天下に著はる

歐陽脩の死

時に轍年始めて十九なりと云ふ歐陽脩、字、永叔、剛直にして尤も文に長せしか是に至りて卒す年六十六、安石、亦、文を能くし學深く剛果にして自信に篤く人の新法を非議するあれは反て益〻之を行へり蓋し其法見るに足るなきにはあらされとも濫りに小人を引用し舊慣を破り輿情を排して實施せるか爲め其弊遂に農商を苦怨せしむるに至れり

新法の弊

遼夏の邊隙　帝はかく內には安石を用ひ法を變し財を儲へ戎狄を攘はんとせしも反て人民の怨を受けしのみならす外には遼夏の邊隙を生したり初め仁宗の時西夏に和を許せしより西方久しく無事なりしか英宗の末年宋將和謂と云ふもの西夏を襲ひ宋の故地、綏州（陝西省延安府綏德府）を復せしより帝の時に及ひて夏人、蘭州（陝西省臨洮府蘭州）に入寇し西邊大

に騷擾せしを以て安石は吐蕃（チベット）の領有せる武勝（甘肅省蘭州府狄道州）の地を得て之に城き熙河路を置き西方を經略せしも成兵多く死亡し且之か爲めに怨を吐蕃に構へたりしのみならす南方の諸蠻猺及交趾等の紛擾をも生〻たり

熙河路

當時契丹は遼と改號して勢益〻強盛なりしか帝成を熙河路に置き其他朔方に都作院を設け兵器を作りしことありしを以て宋の己を圖り燕の地を復せんことを疑ひ屢〻使を遣はし蔚（直隸府宣化府屬州）應（山西省大同府屬州）朔（山西省朔平府屬州）三州の地を得て分水嶺（陝西省平陽府臨汾縣の西）を以て界と爲さんと請へり帝、安石の勸に從ひ之を許し北方の地、百餘里を失ひたり是に於て遼の版圖は南、白溝河（直隸省永平府盧龍河東北）より北は膆胸河（克魯倫河、內蒙古謝臣汗部）に及ひ東は高麗に達し西は夏國と相接するに至れり帝はかく內外、志を得さりしより追悔憂憤の餘、在位十八年、壽

契丹の改號

分水嶺の地界

遼の版圖

三十八を以て崩せり太子煦立つ是を哲宗とす

第三章　哲宗徽宗の世

高氏の更化　哲宗、幼冲を以て即位せるか爲め神宗の母、太后高氏、朝に臨み天下の前代を厭苦するを知り主として司馬光に任し文彦博、呂公著、呂大防、范純仁等を用ひて務めて新法を排除し且、安石の徒を罷免せしかは章惇、刑恕、蔡確等の徒、互に相往來して一派を爲し司馬光等の徒を彈劾せんとせしを以て王覿、劉摯、朱光庭、蘇轍等ば大に安石の徒を論したり司馬光、之か首領と爲り愈、新法を革除して止まさりしかは當時之を譏りて新法は姑く其甚しきものを損すれは足らんと云ふに至れり安石又常に曰く終始新法を行ふへきと爲すものは曾子宣（布の字）なり終始行ふへからすと

司馬光肖像

（聖賢圖）

生し邊隙を開く勿れと程顥、亦、光に先つ一年にして死す顥は監察御史を以て屢、神宗を輔翼し司馬光等の重する所と爲るや嘗て曰く新法の行はるゝ吾黨、之を激成す今日の禍、獨安石のみを罪すへからすと顥は河南の人、弟頤と周敦頤に學ひ理學を以て著はる學者稱して明道先生と云へり敦頤字茂叔、稱して濂溪先生と云ふ顥の友、張載、邵雍等、皆、儒學を爲すものは司馬君實（光の字）なりと是に至りて死せり光、亦、相たる僅、八月にして享年六十八を以て死す光、人と爲り學博くして德篤し遼人嘗て邊吏を戒むらく中國、司馬を相とす事を

洛蜀朔の黨爭

以て著はれしか共に神宗の世に沒し是に至り顥亦死せしを以て學者顥を師宗こゝし伊川先生こ云へり

然るに司馬光の死するや朝臣互に排軋し分れて洛(河南)蜀(四川)朔(直隸)の三黨こ爲る初め程顥は蘇軾こ共に經筵にありて學說意氣の投合せさりしより是に至り互に隙を爲し頗の門人朱光庭賈易等は言官たるを以て軾を斥けんこせり是を洛黨こ爲す御史中丞胡宗愈諫議大夫孔文仲等は顥を責め軾を救ひたり是を蜀黨こ爲す軾之か首こなり呂陶等亦之を翼けたり朔黨は劉摯王巖叟劉安世の徒之か首領たり蓋劉摯等居る所の地相同しく守る所の職相近ふして議論協合せるを以て洛蜀二黨の外に立ち超然自ら守るこ雖も獨り王巖叟は私かに光庭を右けたり

是の時に當り呂大防范純仁等の徒獨り黨比せさりしか會

調停の說

朝臣は安石の徒蔡確を斥け新州(廣東省肇慶府新興縣)に謫せしかは呂大防范純仁之を爭ひ大に朝臣に逆ひ又安石派の朝臣の排軋に乘し怨を報せんこするを憂ひ安石派を朝廷に用ひて其憾を解かしめんこ試みたり是を調停の說こ云ふ蘇轍等力めて其不可を論したり

太后の遺言

かく安石派の外に朝臣互に軋轢して止まさるを以て太后之を憂ひ死に臨み呂大防范純仁等に謂つて曰く老身沒後必す官家を調戲するものあらん宜しく之を聽く勿るへし公等も亦宜しく早く退き官家の爲めに一番の人を用ふへしこ太后崩し帝の政を親らにするに及ひて揚畏曾布章惇等の徒朝に立ち神宗の政を紹述せしめたり

哲宗の紹述　太后已に崩し哲宗政を親らにするに及ひて侍御史揚畏は太后垂簾の政を排擊し神宗の法を紹述せ

章惇の專恣

んことを勸め其黨を薦めしかは帝も大に之を信ず是に於て章惇相と爲り蔡京、刑恕等の徒を引きて羽翼と爲し新法を復し先つ司馬光、呂公著等の官を追貶し尋て呂大防、范純仁、其他、蘇軾、孔文仲、朱光庭等を廢黜し遂に高太后まで追廢せんとするに至る是全く神宗の法を紹述するに託し夙憾を解かんとするにあり其弊、徽宗の時に至りて益甚し

向氏の臨朝

徽宗の昏德　徽宗卽位の初めは向太后、朝に臨み范純仁、韓忠彥等の徒を登用し司馬光、文彥博等の官を追復し刑恕章惇、蔡京等の徒を斥け前代の弊を改めんとせり然るに曾布、復、出て、帝の意を逢迎し蔡京、復、用ひられ司馬光等の官を追奪し其黨を籍して姦黨と爲し新法を行ひたり其子攸、亦、大に用ひられ其勢甚盛なり帝之を顧みす土木を事とし神仙を信し詩賦繪畫を好み士を取るに畫を以てし遂に金

蔡京父子の專恣

金の興起

人來寇を禍を惹き起こしたり

遼の滅亡　當時女眞の東方按出虎水（阿勒楚喀河）の畔に崛起するあり其國、東は海に瀕し南は高麗に鄰り世、遼に屬し宋に通せしか其主大祖（阿骨打）は國號を金と改め遼の寧江州（滿洲吉林省治）を取り黃龍府（盛京省開元縣治）等を陷れしかは宦者童貫は燕人馬植の策を用ひ金に通し遼を夾み攻め列聖の恨を雪かんことを帝に勸む蔡京、父子頗る之を贊し遂に好を金に通し且、約すらく事成らは石晉與へし所の燕、薊十六州の故地を宋に與へ宋は遼に與ふる所の歲聘の數を金に贈らんと童貫、蔡攸、种師道等、大兵を勒し北伐して遼と白溝（直隸省保定府新城縣遼宋境界の處）に戰ひ引き還る帝更に童貫、劉延慶に命して再擧せしむ宋師亦敗る金人、居庸關（直隸省宣化府延慶州の東）より進んて燕京を陷れ悉く遼の版圖を有し平州（直隸省永平府）を以て南京と爲

金宋夾攻の議

燕京の陷落

し張斐を以て留守たらしめたり

宋是に於て趙良嗣をして地を金に求めしむ金主僅に燕、蘇六州の地を與へしのみ後、張斐、平州を以て來り降る宋、張斐を以て平州節度使と爲す是に於て金、宋の間隙相生せり

遼の滅亡及西遼の建國

遼王天祚は燕京陷りしを以て出でゝ西夏に依らんことせしか西遼、金に通するを以て至る能はず遂に金人の獲る所となれり其族、耶律大右、西走して別啜薩軍（中央亞細亞七川州境內吹河の上）に至り更に國を建てゝ延慶康國と號す是を西遼とす遼は太祖（阿保機）より九世二百十年にして亡ぶ（紀元千七百八十五年崇德天皇天治二年）

宋の徽宗は內外の禍絶えさるを以て自ら責を引き位を欽宗に禪る

第四章　金人の來寇

金人京城に逼る宋の媾和

金人の來去　欽宗の時に至り金人已に河を渡り相（河南直隸省彰德府）、濬（河南省衛輝府淇縣）を陷る宋師、皆、潰散す金人遂に滑州（直隸省大名府滑縣）を陷る帝是に於て王黼を退け鎭江（江蘇省江蘇府）に逃る童貫、蔡收等、亦、南行自全の計を爲す帝乃ち李綱を以て汴京を守らしむ金人次第に京城に逼る宰相李邦彥等、和を主とし李綱等、戰を主とす帝遂に李邦彥の說を納れ使を金軍に遣はし和を乞ふ金人犒師の金帛、及、大原（山西省大原府）河間（直隸省河間府）中山（同省定州府治）の地、及、親王宰相を質と爲さんことを求む帝乃ち內帑、及、京城市民の金銀を總括して肅王樞、及、少宰張邦昌をして金營に至らしむ然るに李綱、姚平仲等、間かに金營を攻めしかは帝驚き李綱を退け金人に謝し更に康王構を以て肅王樞に易へて質と爲し遂に割地の詔を與へしかは金人北に去り京師始めて圍を解き李綱、復、用ひられ帝、亦、京師に還りた

金人北去

り

汴京の陷沒　金人北去せしより上下恬然として邊事を不問に付せし時に當り金人宋の書を金の將に遣り反を勸めたりと稱し之を責むるに託し斡離不（アウリホツ）、粘沒喝等の諸將、道を分ちて復、京師に逼る然るに言者は李綱の戰を主として寇を招くと爲し遂に李綱を罷く唐恪、耿南仲等、和議を主とし錢蓋、張叔夜等の勤王の師を止めて曰く今、百姓困置の際、各路勤王の兵、數十萬を城下に於て養ふは何を以て給せんと帝、遂に之に從ひ和を金を入る金人、徽宗の來營を求む徽宗、會、病に罹りしを以て欽宗代りて之き徽宗、亦、其翌年を以て至る是に於て金人大に京城を掠め張邦昌を汴京に册立して楚帝と爲し徽、欽二帝、及、后妃、太子を劫かし去る李若水、張叔夜、何桌、秦檜等、皆從ふて北行す、汴京曩に圍まれしより四十日にして復、陷り金人止まるもの凡、七月にして去れり太祖卽位より是に至るまで九世百六十八年、我、紀元千七百八十七年なり

唐恪南仲の和議

蔡京の沒落及二帝の北行

康王の迎立　初め汴京、再、圍を受けしとき康王構、逃れて濟州（山東省濟寧府）にありしか是に至りて張俊、宗澤、韓世忠等之を應天府（河南省徽府治）に迎ふ張邦昌、亦、宋人の己に服せさるを以て王を勸進して卽位せしむ是を高宗とす是に於て宋室、復、興る

李邦彥耿南仲の罷竄

第五章　金宋の戰和

宋室の復興　高宗の位に卽くや和を主とし國を誤りしとて李邦彥、耿南仲等を罷竄し復た李綱を召して相と爲し宗澤を以て汴京（河南省開封府）に知たらしむ李綱自ら內治を總理し河の東北を撫し邊防略、緒ありしか汪伯彥、黃潛善等、亦、帝

李綱の邊防

の信任を得しより李綱相たること僅、七十日にして罷めらる金人宋の復興を聞き復次第に南下す帝之を畏れ揚州に逃る

時に金將斡離不已に死し粘沒喝、兀朮等の諸將道を分ちて來寇し兀朮進みて汴に至る宗澤之を破り帝の汴に還り北伐せん事を勸めしも潛善、伯彥等之を沮む是より兩河の地は悉く金の所有と爲り帝播遷して定所なきに至らんとす

高宗の播遷 粘沒喝已に淮を渡り揚州に至らんとせるを以て帝は揚州より出て鎭江(江蘇省鎭江府)より杭州(浙江省杭州)に出奔せり時に御營の將苗傅、劉正彥等亂を作し高宗をして位を太子旁に傳へしむ韓世忠、張浚の徒亂者を討し帝をして位に復し潛善、伯彥の徒を退けしむ已にして金將兀朮等、燕雲、河朔の兵を大擧して南下し遂に江を渡り南方諸郡を陷

宗澤

高宗の出奔及兀朮の來寇

臨安の定都及金人の北去

る帝出てゝ明州(浙江省寧波府)に奔り又、温州(浙江省温州府)に次す兀朮來り臨安(即チ杭州)を焚掠す韓世忠之を破る帝遂に臨安に回り以て帝都と爲したり已にして兀朮は鋒を轉〻て撤離喝等と陝西に向ひしか吳璘、吳玠等の破る所と爲り遂に陝西の地を宋の降將劉豫に與へ且、金主太宗(晟)の疾篤きに會し北に去れり

劉豫王倫秦檜

劉豫は是より先、金に降りて其册を受け齊に封せられ後、汴に徙り屢、金を輔け南侵せしか是に至り金は劉豫を廢し又、王倫、秦檜等を宋に還へし其歡心を得、和を媾し宋の備を忽にせ〳〵めんとせり

和說戰論

金宋の媾和 此の時王倫、秦檜の徒、北より還り金の勢威、甚、強きを徵し媾和說を固持す趙鼎、其他、志士は皆謂ふ檜の和議を唱ふるは金將撻辣の意を受けしに因ること金を不

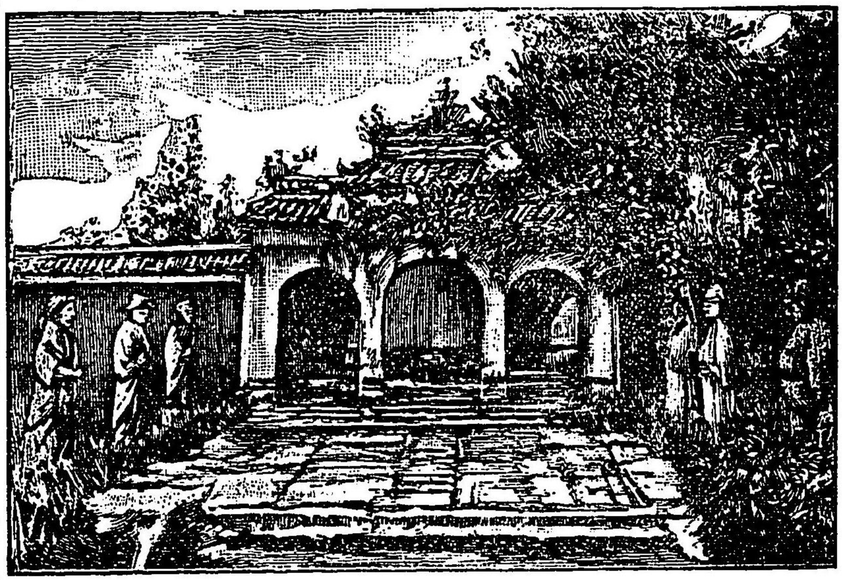
金使張通古來る

胡銓の封事

具戴天の讎と爲し大に戰論を主張せり會〻徽宗の凶問至りしかは帝は王倫をして金に行き其梓宮を迎へ且和を議せしむ金人張通古を以て江南詔諭使と爲し倫と與に來り河南、陝西の地を宋に與へんと言へり帝、金使の詔諭を以て名と爲すか爲の心自ら安せす和好の得失を郡臣に議せしむ胡銓、封事を上り和好の非を論し王倫、秦檜を斬らんと請ふ李綱、張浚、岳飛、其他、尹焞、朱松の諸儒に至るまて皆之を駁し戰を主とす秦檜、是に於て變の生せんことを恐れ胡銓、世忠等を退け王倫を遣はし地を金に受けしめ遂に汴京の留守と爲せり

已にして金の兀朮は撻辣と隙を構へ其主熙宗(亶)に說きて曰く彼は秦檜と善し故に力めて和を勸む是必す陰謀あらんと撻辣果して反して誅せらるゝに及ひ金人遂に盟を渝へ王倫を執へ兀朮をして河南を侵さしめ撤離喝をして陝西に向はしむ時に宋將劉琦は兀求を順昌(安徽省潁州府)に破る秦檜急に之を召し還へす獨り岳飛は進て郾城(河南開封府の屬縣)より朱仙鎭に至る兀朮大に畏れ退て汴にありしか書を秦檜に贈り飛を殺さしめんとす是に於て秦檜、帝に啓し金字牌を以て之を召し還へし其子岳雲と共に誣殺せ

棲霞嶺下岳飛廟　(寫眞)



金宋の和相

和議の効果

り飛は蕩陰（河南省影德府蕩陰縣）の人平生背に盡忠報國の四大字を涅刺す其壽、實に三十有九

兀朮已に飛の死せしを聞き且、金の北方に蒙古の間隙を伺へるを以て金主をして和を宋に許さしめ淮水を界と爲し唐、（河南省南陽府）鄧、（同省屬州）二州を金に入れ西は大散關（陝西省鳳翔府寶鷄縣）を以て宋の界と爲せり初め帝の臣を金に稱せし以來金は宋に書を贈るに帝號を稱せさりしか是に至り帝を册して宋帝と爲し又歲貢の數をも定めしめ且、徽宗の梓宮、帝の母韋太后を還へし和議全く成れり（我紀元千七百九十七年）

然れとも時論紛紛、尙、和議の非を論して止まさりしを以て秦檜は其徒を誅鋤し人をして己を議する勿らしめ遂に自ら媾和の功を恃み死に至るまて權を專にせしも其和好を結ひし爲め南北大に平和に歸くたり此の時欽宗年六十を

金亮の遷都及南上

采石の戰及金亮の死

以て金に崩せり金主熙宗、亦、其族人亮の爲めに弑せられ亮立つに及ひ和破れ金、宋の戰端、亦、開けたり

金亮の入寇　初め金は其興起地なる按出虎水（アルチユク）の邊を更めて會寧府又は上京と稱して世、此に都せしか是に至り亮は其一隅に僻在するを以て都を燕に遷し宮殿を營み宋を滅して海內を一統せんと欲し私かに人をして宋都臨安の圖を寫さしめ自ら詩を題すらく萬里車書盡混同（セサル）江南豈有別提封。提兵百萬西湖上。立馬吳山第一峰と復、都を汴京に遷し前盟を渝へ自ら將とし水陸兩路より來り攻む帝、難を建康に避く亮、既に淮西諸郡を陷れ江を濟らんとせしかは虞允文、舟師を以て采石（安徽省太平府城の北西）に迎へ戰ひ之を破る吳璘、劉琦、李寶等の諸將、亦大に金人を破る金人叛し亮を揚州に殺して北に還り太宗の孫烏祿立つ是を世宗とす宋主高宗、

亦、在位三十六年を以て位を太子孝宗に禪る是を我、紀元千八百二十三年の事とす

孝宗の政治

宋金の小康　孝宗、意を恢復に用ひ大に張浚に任し北伐の計を爲さしむ金人、亦、宋の貢禮を取らさるを慍り南下して淮陽(河南省陳州府)に至る李顯忠、金人と戰ひ互に勝敗あり帝爲めに使を金に遣はし和を請ひ北征の志大に挫けたり然れども兩國報答の書式、及、歲幣等の數は前代より、大に更まれり、之か爲め中外戰爭の禍を免れ一時南北の小康するに至れり

世宗の政治

金主世宗人と爲り沈毅誠實尤も儉素を尚ふ嘗て左右宗戚を誡むらく汝等儉約を務めて祖宗の艱難を忘る勿れと又女直の舊風最も純厚なりとして北人の南方の外飾を裝ふを禁し學士に命〜て女直大學を建て學を勵まし道德を修めしむかく內、政治を釐正し外、高麗、西夏を撫綏し遼、宋、宗族の來り死せ〜ものに至るまて禮を以て改葬せり故に北方大に治り小堯舜と號するに至る孝宗の北伐の志を達せさりしものは蓋し之か爲めなり世宗在位二十八年を以て崩し其子章宗立てり

陳和卿及僧榮西道蓮

宋主孝宗、亦、在位二十七年にして其子光宗に讓る時に我、紀元千八百五十年、後鳥羽天皇建久四年なり此の頃宋の佛工陳和卿と云ふもの我、鎌倉に來り又、我僧榮西、江南の茶種を持ち還りたりと云ふ後、(寧宗嘉定十六年(白河天皇貞應二年))榮西の徒道蓮(即チ加藤景正)亦、宋に行き甕陶法を學ひて還る世に之を瀨戶燒と稱す光宗在位五年にして其子擴に禪る是を寧宗とす時に權臣韓侂胄權を恣にし宋室の國是大に變したり

侂胄の專恣　帝卽位の初、趙汝愚相と爲り僥倖を裁抑し

て治を圖りしか韓琦の曾孫韓侂胄は定策の功を恃み不次の選拔を希ひしに趙汝愚之を排し遂に侂胄の爲めに反を謀ると誣告せられて死したり是より侂胄權を專にし諂諛の小人日に其門に聚る侍郎趙師睪は犬の吠聲を爲して侂胄に媚を入る書生之を嘲り歌ふて曰く曾學犬吠村莊と睪は帝の宗室なり然るに朱熹は經筵に在りて進講毎に大義明分を明にし侂胄等の竊柄を疏論して止まさりしかは侂胄私かに之を怒り帝に謂ふて曰く貪黷放肆なるは人の眞情なるも廉潔好修するは僞のみと熹の學を

朱熹肖像

（名賢圖）

陸九淵肖像

（名賢圖）

熹、字は晦庵、婺源（安徽省徽州府婺源縣治）の人朱松の子にて程氏の學を目して僞學と爲し四書六經を以て世の大禁と爲し其徒、彭龜年、黃由度、其他、汝愚の黨類、及、大學生揚宏中等を搏擊し權、人主を傾け罪惡の極邊隙を生したり

宗とす熹の同志に張拭、呂祖謙等あり皆熹に先て卒す惟り熹老いて學問、益、高く學者之を師宗とし晦庵先生と云へり又、陸九淵と云ふものあり理學を以て著はる然れとも熹と頗る意見を殊にせり是を象山先生と稱す

孝宗より以來南北通好せる事四十餘年の久しきに及ひし

佗冑の北伐

か當時金は内、小人事を亂り外、北方蒙古の爲めに苦められしかは佗冑は其隙に乘し北伐の功を立て永く其地位を保たんと欲し其徒李壁をして詔を草せしめ吳璘の孫、吳曦に命して西蜀に兵を練らしめしか曦叛き降るを以て更に北伐の師を出し一時金人を破りたり已にして金人大擧して來り蜀漢、荆襄、兩淮等を陷れしかは佗冑恐れ私かに和を求めたり

佗冑の推殺及媾和

金人、亦、北部蒙古の恐あるを以て宋の和を許し約するに地を割き臣と稱し且、首謀者佗冑の首を得んと言へり佗冑之を怒り再擧を企んとせしかは侍郎史彌遠、其入朝の時を待ち人をして佗冑を椎殺せしめ其首を金に贈り歳幣を增し淮南の侵地を購ひ和を媾したり彌遠、功を以て丞相と爲り亦、政を專にせり、寧宗在位十三年にして崩し太子昀立つ是

を理宗とす是より先、金は章宗崩し其叔父衛紹王(永濟)を經て宣宗立ちたりしか蒙古の侵寇益、止むこと能はさるなり

第六章　金宋の末路

蒙古の太祖

蒙古の興起

蒙古は金の北部韃靼の別種にて其先を孛端兒(ボドンチャール)と云ふ世、遼、金二國に屬せしか鐵木眞に至り年十三にして始めて兵を起し鄰部塔塔兒(興安嶺附近)蔑兒乞(塔塔兒の西色楞格河邊)克烈(塔塔兒の南方)泰赤烏(貝加爾湖南邊)乃蠻(泰赤烏の東部)等の諸部落を合せ衆議を歷て斡難河(魯西亞の尼布斯科の南方)上に於て汗位に上り(宋孝宗末年我後鳥羽天皇文治中頼朝將軍の時代)成吉思汗と號す後、皇帝の位に卽けり時に年四十五(宋寧宗開禧二年我土御門天皇建永元年)是を太祖とす

初め太祖は金衞紹王立つを聞き之を侮りて曰く中原の皇帝は天上の人、做ること思ひしに此輩、亦爲るかこと遂に金と絶

ち其主宣宗の時に至り金の烏沙堡を破り德興府（直隸省宣化府治）を拔き居庸關を越え其都燕京を圍む金人和を入れ汴京に移る太祖其和して又都を遷すを以て金人貳心を抱くこと爲し復、汴京に逼る是に於て金は大抵河北の地を喪ひ餘す所は僅に潼關（陝西省同州府）以東、眞定（直隸省正定府治）以南の地のみ已にして太祖北に還り其將木華黎をして金に當らしめしか木華黎、病に死するに及ひ兩國の戰、一時中止したり

金宋の不和

宗は斯く金の外患あるを幸とし歲幣を輸さゝりしか金主宣宗崩し哀宗立つに及ひ宋の歲幣を輸さゝるを責むるを名とし國境を擾めんとして蜀漢、兩淮の地を奪はんことせり眞德秀等之を怒り忠義軍を募り前恥を雪かんと請ふ趙方孟、宗政等、金兵と棗陽（湖南省襄陽縣）に戰ひ大に金師を潰散せしめたり

太祖の攻金

太祖は北去以來東は高麗を服し西は畏吾兒（回鶻）、西遼（即チ延慶康國）一ニ黑契丹ト云フ又花剌子ト云フ）花剌子模、及ひ阿羅思（魯西亞）等の諸國を伐ち都を和林（大漠杭愛山の南カラコルム）に定め又西夏（一ニ唐兀ト云フ）を親征し更に進んで金を滅せんとして途、大盤山（陝西省平涼府陰德縣）に殂す年六十六、太祖兵を用ふる神の如く木華黎、博爾求、博羅忽爾、赤老溫の四傑、之に將と爲り朮赤、察合台、窩濶台、拖雷の四子、遠征を事とし耶律楚材、內にありて財政を治めたり故に當時蒙古の强盛なる古來未た其比を見す殊に他國を征すれは必す子弟を封し宗支蕃衍の功を收めんとせしか如きは其尤も用意の存する所とす長子朮赤は吉利吉斯、荒原より露國の南部一帶の地を領せり是を欽察汗國とす次子察合台は回疆より阿母河に至る西遼の地に封せらる是を察合台汗國とす四子拖雷は蒙古の舊土に封せられ其附近の諸部落

太祖の雄略

蒙古の封建

を領し三子窩濶台は乃蠻の故地に封せられ薛靈哥河より也迷里河邊を領したりしかば是に至り太祖の歿するに及び位に卽けり是を太宗とす太宗、父の志を紹き金を滅せんとせり

金の疲弊

金國の滅亡　金は汴京に徙りしより已に二十餘年を歷しも蒙古の師、一時、北去せし爲め士民愈、文弱に流れ楊雲翼、趙秉文、元好門等の名儒少からざりしも舊時の慓悍勇武の風衰へ殊に北方は蒙古に冒され南方、亦、宋と兵を用ひたるを以て國內大に疲弊せり是時に際し蒙古主太宗は道を宋に假り弟拖雷、及、速不台と道を分け汴京を圍む城兵善く防ぐ蒙古、震天雷を以て之を攻む城兵、亦、火砲を以て之に應す蓋し火器の戰は是を始とす金人其敵すへからざるを知り質を入れ和を乞ふ太宗、速不台をして軍を河洛の間に退かしめ自ら北に還る

金の媾和

汴金の沒落　已にして金人、蒙古の使者を殺し和議遂に絕え速不台進て汴京を圍む金主守を棄てゝ南方蔡州（河南省汝寧府）に逃る是に於て蒙古は宋と力を合せ金を夾み攻め成功の日は河南の地を宋に與へんとして援を宋人に借る宋遂に之を聽き孟珙をして蔡州の東南を攻めしむ蒙古は其西北よりす金人苦戰食盡き完顏阿虎帶をして宋に來り糧を乞ひ且連和の意を告く宋人聽かす益、之を攻む金主哀宗遂に自剄す金太祖より此に至るまて凡、九世百十七年、（紀元千八百九十四年）を以て滅亡したり蒙古已に金を滅し陳、蔡、東南の地を宋に與へ其西北を自ら領し北に還れり然るに趙范、全子才の徒、亦、金の滅亡に乘し北方の地を恢復せんとて兵を以て汴京、洛陽に至りしかは蒙古は王檝を遣はし宋の恣に兵を出し盟を破る

宋蒙金を夾攻す

哀宗の自剄

宋蒙不和の原因

拔都の遠征

蒙古の形勢及諸王の遠征

を責め遂に南下して淮漢の間を爭擾せり

蒙古の來寇　當時、蒙古の太宗は宮殿を和林に造營し朮赤の子拔都、太子貴由、姪蒙哥等をして西域諸國を征せしめたりしか其中拔都尤も遠征し阿魯思(魯西亞)孛烈兒(波蘭)馬札兒(匈牙利)揑迷思(獨逸)等の兵を破りて還り遂に都を撒來(瓦剌牙ノ下流)に定め欽察汗國の主と爲る是を金黨の汗とす其兄幹耳朶をして其東方を治めしむ是を白黨の汗とす又、太宗の孫合矢の子海都は拔都に尋て揑迷思(獨逸)孛烈兒(波蘭)の兵を破りて遠征を試みたり會、太宗崩し尋て其子定宗(貴由)立つ太后乃馬眞氏、前後朝に臨み南、好を宋に通し西、書を羅馬法皇に贈り外征を中止したりしか定宗、夙く崩せしを以て皇后海迷失氏、太宗の遺命を挾み太宗の孫失烈門を立てんと欲せしも諸王大臣服せさるを以て太祖の孫拖雷の子憲宗(蒙哥)を立つ憲

宋の形勢

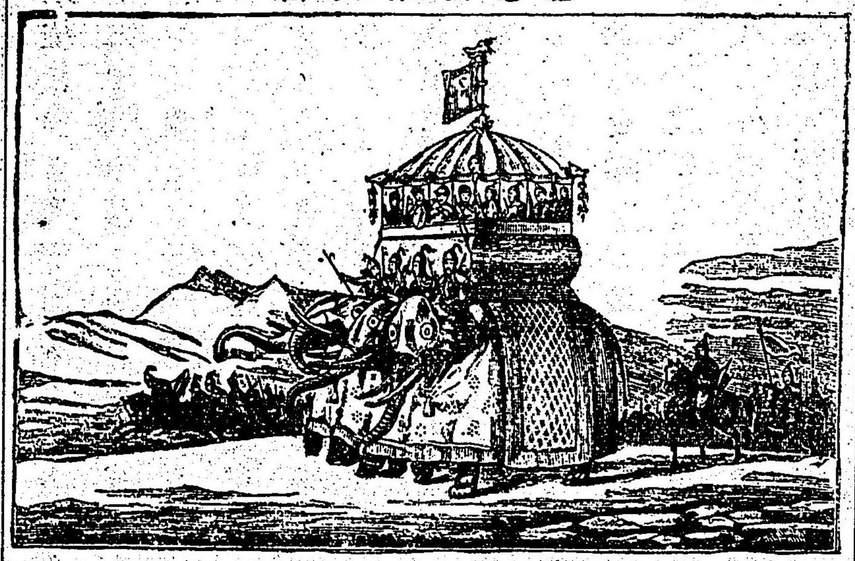
宗位に卽き失烈門等、不服の徒を斥け外は吐蕃、忻度(印度)を服し大理(雲南)を滅し更に其弟旭烈兀をして西征せしむ旭烈兀進んで報達(土耳古低格里河畔)を伐ち回教國を征し法王を禽にし密昔兒(埃及)を蹂躙し遂に達布利斯(波斯の西北境)に都し伊蘭汗國を領せり又、母弟忽必烈をして宋を攻め鄂州(湖北省武昌府治)に逼らしめたり

宋は已に權臣史彌遠死し理宗始めて政を親らし眞德秀、魏了翁等の正人朝にありしも史嵩之、權を用ひ悉く正人を排除し且、蒙古と兵端を開きし以來、淮、漢の地日に爭擾せし爲め帝、己を罪するの詔を降し諸將をして北人に備へしめしか後又政に倦み內は閹官盧元升、董宋臣、及、閻貴妃、丁大全等に任し外は賈似道をして蒙古を鄂州に拒かしめたり

已にして賈似道は鄂州の守る能はさるを以て私かに和を

宋蒙の媾和及忽必烈の即位

忽必烈乘象圖



（イスト アールドシーヌ）

忽必烈に入る忽必烈は其主憲宗崩し其弟阿里不哥自立して尊號を襲ふと聞き遂に之を許し長子眞金をして燕京の留守と爲し張傑、閻旺を守備爲しと還り位に即けり是を世祖とす阿里不哥、北に逃れ抗せしか遂に來降せり然れとも太宗の子朮赤等は世祖の衆議に依らすして僭立せるを慍り叛服常なきに至れり後、世祖、燕京に移り

郝經の拘留及宋蒙媾和の破裂

賈似道の淫宴及宋將の降服

大都（直隸省順天府大興縣治）と稱し國を元と號したり

賈似遺、鄂州より軍を引きて朝廷に還り和を元に入れしを詐り北師を敗去せしめしと爲し人をして福華編を撰みて己の功德を頌せしめしも元主の郝經をして和盟を尋ねしむるに及ひ事の露はれんを恐れ郝經を途、眞州（江蘇省揚州府儀徵縣治）に拘留せり元主、亦、其幽せらるを聞き且、賈似道に欺かるゝを怒り南征の詔を下せり時に宋主理宗在位五十一年にして崩し太子禥、立つ是を度宗とす

宋室の滅亡　元人大擧して襄陽（湖南省襄陽府）を攻む守將呂文煥、救を朝廷に求む賈似道、臺榭を西湖（江蘇省杭州の西）に起し日に淫宴を事とし外患顧みさりしかは文煥、范文虎、其他、廷臣、踵を接して降る謝太后乃ち歎して曰く我、朝三百餘年士太夫を待つ家の多難に遭ふも一言の國を救ふものあらす平日

聖賢の書を讀み此擧措を爲すこと度宗在位十年にして崩し
太子㬎立つ是を孝恭こす
孝恭年甫めて四歲、太后朝に臨めり時に元將史天澤、伯顏等
は兵を襄城（湖南省襄陽府治）襄陽に會し宋の降將劉整を以て先導
こと爲し騎兵を以ゐて淮泗を出て呂文煥をして舟師を以て
襄陽より嚮導せしむ伯顏、行、火砲を放ち宋師を殪し東の方
建康に及へり賈似道和を請ふ伯顏聽かす攻むる愈、急なり
鎭江（江蘇省鎭江府）饒州（江西省饒州府）等皆、降りしかは張世傑、文天祥、李芾
等の志士、諸路勤王の士を募り閩廣を守り恢復を萬一に期
せんとせしも宰相陳宜仲、之を沮み和を伯顏に求む天祥、世
傑等之を怒り城を背にして戰はんとす宜仲從はす傳國璽
を以て降る伯顏、建康より進んで臨安を陷れ帝、及、太皇太后
謝氏、太后全氏を獲て北に還り後、帝を殺せり伯顏詩あり曰

宋の降將の嚮導

李芾張世傑文天祥

臨安の殘落

く電掃風煙過嶺馳、王師到處悉平夷、擔頭不帶江南物、只插梅
花一兩枝、と
臨安、陷落の時に當り帝の二兄益王昰、衞王昺は逃れて温州
（浙江省温州府）にありしかは陸秀夫、張世傑等は益王を福州（福建省福州府）
に迎立せり是を端宗こす元兵復、來り侵す帝潮州（廣東省潮州府）よ
り吳州（廣東省高州府吳州縣南の島）に逃れ遂に崩す年、僅に十一帝の弟衞
王昺を立つ是を帝昺こす年甫めて八歲、秀夫、常に舟中に於
て大學章句を勸講す已にして厓山（廣東省廣州府新會縣南の島）に播蕩せ
り此の時、元將張弘範は舟師を以ゐ來り攻む世傑、力戰、善く
拒く是より先、文天祥は潮陽（廣東省潮州府潮州縣）に於て執はれて元
軍にありしか是に至り張弘範は文天祥に命して書を爲り
世傑を招かしむ其嘗て過りし所の零丁洋（廣東省廣州府香山縣の海洋）の
詩を書し之に與ふ曰く人生自古誰無死、留得丹心照汗青、と

端宗及帝昺

厓山の戰及帝昺の入水

楊氏及世傑の死

宋の叛服及文天祥謝枋得

弘範、其強ふへからさるを知り進て崖山に海口に逼る陸秀夫其免るへからさるを以て、先妻子を驅りて海に入れ帝を負ひて水に投せり尋いて楊太后及張世傑亦溺死せり宋は高宗の卽位より此に至るまて九主一百五十二年、元の至元十六年（紀元千九百年）にして滅ひ元遂に天下を一統したり然るに當時、漳州（福建省漳州府）の陳桂龍、建寧（福建省建寧府）の黃華等、宋の遺民を以ゐ世祖の身を終ふるまて叛服止む能はさるに至れり又謝枋得、文天祥の二人節を守り屈せすして死す

元我日本に來寇す

元兵の敗北

近世史

第一編　元

第一章　元の混一

世祖の外征　世祖、已に宋を滅し南北を統一し西、威を歐洲に輝かしたりしも東方、獨り我、日本國の來聘せさるを怒り忽敦、洪茶丘等をして兵艦を裝ひ來り我、對馬を掠め進て博多に寇せしむ會、大風起り元軍、志を得すして還る（至元十一年我龜山天皇文永十一年十月二十日）元主大に怒り忻都、洪茶丘、范文虎、阿剌罕等をして宋の降兵、高麗、西域の兵を擧け道を分ちて先つ對馬に來る（至元十八年弘安四年五月二十一日）已にして筑前太宰府に逼る河野通有、草野次郎、竹崎季長等、善く、拒く大風、復、起り船艦覆沒し生きて還るもの僅に三人のみ是を至元十八年八月朔日、我、

我日本再寇の中止

倭寇の起原及都元帥府の設置

蒙古襲來圖

後宇多天皇、弘安四年閏七月朔日、紀元千九百四十一年の事とす

元主、又、我を侵さんとせしか當時、占城、交趾等に兵を用ひ國內爭擾せるか爲め劉宣の諫を入れ一時其擧を中止したり然れとも高麗に於ける我に來寇の備は未た[illegible]るなり然るに我、邊[illegible]是の役より益、外人を侮り高麗、及、元の邊海に出沒侵略せり是を

西南の平服

世祖の徵歛

文學宗教

倭寇と稱す元主之を憂ひ都元帥府を四明（浙江省寧波府）に置き海道を防かしめたり斯くて元主は占城、交趾を服し尋ひて緬國、瓜哇等の西南諸國を平けたり

世祖の內政

世祖、外は武威を四方に輝かし內は阿合馬、盧世榮、桑哥等の徒を用ひ富國の實を擧けしめんとして魏博の渠（直隸省大名府治）を開き江淮の運河を通し名を會通河（即ち北運河、山東省兗州府に至る）と命し又、牧蓄貿易の業を盛にするも上下利を好むの弊、却て國帑罷弊するを以て遂に天下の戶口を括取し鹽鐵茶藥に至るまてを徵課し中統元寶交鈔、至元鈔等を作りて利權を上に收め後日の累を遺したり

又、江南各路に儒學提擧司を設けて文學の士を重んし僧八思巴をして蒙古文字を作らしむ八思巴は烏斯藏（即ち前藏の事）の人にて喇嘛教を奉せり世祖、亦、其教を重んし八思巴を以て

大寶法主と爲し且、帝師の號を賜ひしかは桑門浮圖の輩、世
横行するに至れり

中書省の設置及封建

又、中書省を大都(燕京)に置き山東、山西、河北の地を治め其外に行中書省を置きて之を分治、せしむ其長官は國族にして漢人は之か樞機を司るを得す又、諫院を置かす忠直をして下僚に沈み吏士專權の弊を生する少からさるに至りたり其他、他國を征して地を得るあらは必す諸王を封して藩屏と爲しゝは太祖以來の舊慣とす

魯柏魯及鳴爾羅古伯

初、憲宗の朝(憲宗三年西曆千二百五十三年我後嵯峨天皇建長三年)佛國の僧魯柏魯(ルブルク)來り西教を布き裏海記事の著ありしか世祖の時(至元七年西曆千二百七十年我後宇多天皇建治元年)に至り伊國の鳴爾古伯羅(マルコポーロ)を國人爾斯査(ニコラ)に談す爾斯査之を筆記せり其中元人、我、日本に來寇の事あり是を歐人、我を知るの始とす世祖在位三十五年壽八十にして崩す初め太祖は諸王大臣と會議を開き帝王を立つるを約したりしか世祖は大臣專權の弊を慮り其子眞金を以て太子と爲したりしも眞金已に死せしを以て此に至り玉昔帖木兒は眞金の第三子鐵木耳(テムル)を擁立せり是を成宗とす他日大臣恣に帝王を更立するの弊此に啓けたり時に我紀元千九百五十五年伏見天皇永仁三年なり高麗、亦、世祖の崩を聞き始めて我、日本侵寇の備を撤したり後、五年を歷て成宗は僧寧一山、及、其徒子曇等をして好を我に通せしめたり

權臣跋扈の原因

高麗の撤備及一山子曇の來朝

汗國の形勢　初、憲宗崩し世祖即位の時、海都は察合台、及金黨、諸汗國と世祖の僭立を怒り叛抗したりしか是に至り成宗は姪海山をして之を征せしむ海山の破る所と爲り來り降れり金黨は拔都已に死し其弟別兒哥襲き回回教を奉し耶蘇教徒を虐待し威を歐洲に震ひし事ありしか是に至り察合台と共に元に叛き國勢衰へたり然るに後世子孫に及ひて拔都の舊業を擴張し歐洲諸國をして金黨の名を知らしむるに至れり惟、伊蘭汗國は旭烈兀の子阿八哈嗣きし時、世祖は其親睦を圖らんとして皇女を其子阿兒渾に娶せしより子孫世、元に服事し海都、及、尤赤の子孫に抗し國祚、亦、永く繼きしと云ふ

海都の叛杭及金黨伊蘭汗國の叛服

元亦成宗以下順帝に至る十世三十六年の間は權臣跋扈加ふるに宦官と西僧の憂とを免れさりしか順帝に至り紀綱愈〻擧らす其憂益〻甚しきに至りたり

第二章　元の末路

順帝の荒政　順帝の時、燕帖木兒は定策の功を負み己の女を納れ后と爲し日夜淫惡專恣を極めて死せり其子唐其勢、亦、父に代り樞要に位し遂に反を謀り伯顏の爲めに誅せられ伯顏、亦、勢を得て異志を蓄へたり順帝は斯く權臣の專恣なるを憂ひ伯顏の養子脫脫に任して伯顏を誅除せしめんとせり脫脫之を其師、吳直方に質す直方曰く傳に云はす大義親を滅すと子、但、國に忠あるを知るのみと脫脫、遂に意を決し帝に白ふし之を貶したり

唐其勢の反

脫脫伯顏を貶す

時に吳萊と云ふもの經學著述を以て名あり、吳直方の子なり初、世祖、江南の儒士を重んせしより王顎、金履祥、范梈等の

儒者蕃伯の輩出

儒士著はれたりしか是に至り揭傒斯、歐陽玄、呂思誠の諸儒をして遼、金、宋の三史を修めしめ脫脫を以て之が都總裁たらしむ又、成宗以來權臣の專恣するあるも外顧の患なきか爲め朝野文墨技工を玩ふの風大に行はれ倪瓚、黃公望、吳鎭、王蒙等の畫伯皆帝の世に出つるに至れり

內政の紊亂

伯顏、唐其勢の權臣殪れしより帝亦次第に政治に倦み文弱に流れ賢相脫脫を疎んじ宦者朴不花を用ひ朔思監を以て右相と爲し西僧を寵昵し龍舟を作り精工を極め內苑に浮へ淫宴を事とせしかは國內空乏し僞鈔流行し天下大に疲弊せり然るに帝は天下叛亂の起らんことを慮り南人の軍器を持し又其の蒙古文字を習ふを禁し科學を罷め民馬を上に徵斂せしめたり

元室の紊亂　斯く內政紊亂の時に際し韓山童と云ふもの白蓮會を以て衆を惑はし彌勒佛下生して衆を救ふと稱し永平（直隸省永平府）に起り劉福通、又、潁州（江蘇省鳳陽府）に起る曰く韓山童は實に宋徽宗八世の孫なれは中國に主たるへしと愚民を煽動して之に應す其兵紅巾を以て號と爲し後韓山童の子、韓林兒を汴に奉して國號を宋と稱せり其他郭子興は滁州（安徽省滁州府）に張士誠は高郵（江蘇省興化府治）に陳友諒は漢陽（湖北省漢陽府）に起り天下大に亂るに朱元璋と云ふもの郭子興の部下より出て、金陵（江蘇省江寧府）に據り國を吳と稱し江南湖廣等の地を撫

元璋は濠州（安徽省鳳陽府）の人年十七にして皇覺寺の僧と爲り廿にして郭子興の麾下に屬せしか子興の元將脫脫に破らるゝに及ひて廿五にして自ら其兵を領し宋龍鳳（韓林兒の年號）年號を用ひ民望を收め遂に陳友諒、張士誠、等の群雄を平け是に至り金陵（江蘇省江寧府）に據り國を吳と稱し江南湖廣等の地を撫

有し徐達、常遇春等をして北伐して大都に入らしむ順帝は后妃太子を以ゐて北、居庸關を出て應昌府（内蒙古西克騰の西）に奔る元璋、因て金陵に卽位し國號を明と更む年寅に四十是を太祖とす時に我紀元二千二十八年後村上天皇正平二年南北朝分立の世にあり

順帝の北走

後、二年を歷て順帝在位三十八年壽五十三を以て崩す世祖一統より此に至るまて十世八十九年たり其子愛猷識里達剌は帝を和林に稱し王保保擴廓帖木兒の徒之を佐け屢北邊を犯し其宗室梁王把匝瓦爾密は雲南に據りて西南方を騷せしを以て太祖、又、諸將をして之を討せしめ海內始めて一統に歸せり然れとも北邊は常に元裔の蹂躙を免る能はさるを以て之を化外に付せり

元家漠北に據る

百六十

第二編 明

第一章 明初の治亂

太祖の宏漠　太祖既に天下を一統し其都、金陵を以て南京、開封府とし燕京を北平府と稱し又、名城大都を撰ひ其子棣を燕（直隸省北平府）に、㭎を晉（山西省太原府）に其他、宗室諸王數十人を封建し內、以て藩屏と爲し外、以て遑防に備へしむ然れとも其俸祿は萬石に限りて其土を領せしめさる如きは蓋、尾大不掉の弊を慮れはなり又兵制を定め各省に衞所を設け事あれは總兵管、將印を奉して之を督し事終れは之を還すを常とせり其他、中書省を廢し吏部、戸部、兵部、刑部、禮部、工部の尙書をして庶政を分掌せしめて大臣專恣の弊を除き地方官吏を選擇して吏治を重んし衣冠を唐代の舊に復して元俗

封建及兵制

政務の分掌

教育

胡蠻の風を洗ひ科擧の法を設けて人材を登用し尤も力を敎化に致し京師より地方に至るまで學校の設けあらさるはなし宋濂、劉基、王禕の如きは程朱の學に通し且、文辭を以て當代に著はるに至る然るに惟り宦官のみは讀書を禁し又、秀女を民間に選ひて宮中に入るゝか如きは外戚宦官の禍を慮れはなり

宦官外戚の禍を慮る

又、功臣の廟を江寧府の側に建て徐達、常遇春等の肖像を配祀して功臣を待ちたり然れとも左丞相胡惟庸、涼國侯藍國の反するに及ひて李善長、傅友諒等の功臣老將を牽連誅鋤せるか如きは識者の嘲を免れさるなり

胡藍謀反の餘累

太祖の外征

太祖は斯く内、政治を整へ外、諸將をして雪南、平緬、安南等を征し北方胡元主脫古思帖木兒の弑せられしに乘して之を伐ち東方朝鮮太祖（李成桂）をして來服せしむるに至る然るに

日本邊民の患

惟り我、日本邊民の勢は元寇以來益、盛にして屢、山東、沿海を抄掠せるを以て太祖は我、征西將軍懷良親王、及、足利義滿に書を贈り之を禁せんことを請ひ又、沿海に防倭衞所を置きて其抄掠を防きたり太祖在位三十一年壽七十一を以て崩す太子標、夙く死せしを以て其孫允炆立つ是を惠帝と稱す時に我紀元二千五十九年後小松天皇應永六年なり

惠帝の施設

燕王の南侵　惠帝即位の初、先帝の遺命に從ひ漢中敎授方孝孺を召して侍講と爲し齊泰、黃子澄等を用ひて國事に參せしめ又、方孝孺の議を用ひて內外の品官勳階は周禮に倣ふて更定し禮制を撰ひて天下に頒行せり然れとも其事に益なきのみならす先朝の遺制に反せるを以て大に諸王の意を激發したり諸王、亦、叔父の親を挾み驕橫不遜なるを以て帝乃ち黃子澄等の議に因り周王橚（開封に都す）代王桂（大同に都

す）を幽し其他宗族諸王を抑制したり

燕王の謀反

初、太祖の時、宗室諸王と雖も恣に兵權を握るを許さゝりしが獨、燕王棣のみは北方胡元を防かしめんが爲めに私かに之を許し諸鎭將をして其節制を受けしめたりしか是に至り燕王は兵甲の强と形勝の地とを恃み僧道衍を以て謀主と爲し反を企て遂に周公の成王を輔けし故事に倣ひ齊泰黃子澄等を誅し君側を肅清するを名とし寧王權（山西省隰州大寧縣）に都すの護衞諸戍を合せ張玉、朱能等をして南侵せしむ是を靖難の兵と稱す朝廷は耿炳文鐵鉉等をして之を拒かしめ兩軍互に勝敗あり

中官の怨望及燕王の簒立

是より先、帝は先代の遺制を奉し宦官を御すること嚴酷なりしかは是に至り閹豎、皆、怨望して燕王に告くるに京師空虛取るへきの狀を以てす燕王大に喜ひ自ら其兵を督し進

て京師を犯す帝、其免るへからさるを知り自ら城を焚き火中に投して崩す燕王是に於て位に即く是を成祖とす

方孝孺鐵鉉等の死

初、成祖の兵を擧くるや道衍謂つて曰く南方に方孝孺と云ふものあり學問氣節を以て著はる武成るの日には必す降附せさらん請ふ殺す勿れ若し殺さは天下學問の種子絶えんと是に至り執へらる帝爲めに詔命を作らしむ方孝孺乃ち燕賊簒位の四大字を特書し遂に殺さる年四十六、鐵鉉、景清、齊泰、黃子澄、徐輝祖等の忠烈の士殺さるゝもの其數を知らす

成祖の政治

成祖の偉略　成祖簒立の後は大に心を政治に用ひ前代の施設に反し前代諸王の爵位、及、官制を舊に復し北平府を改めて順天府と爲し此に都を定む是を北京と稱す北京の田を開き江南の富民を京城に徙し州縣の租稻を減し又、翰

林學士胡黃等に命して四書五經の註疏、及、性理大全等を輯修せしむ其他、江南の水を治め會通河(北運河)を疏し以て轉運の利を便にし又、僧道衍、及、哈立麻をして天下の佛教を總領せしめ南北兩京に大藏經一部を出版せしめたり

初、建文の時安南主陳日焜は其臣黎季犛に弑せられしか是に至り黎季犛の子蒼は使を奉したりしも日焜の孫、天平來り黎季犛、簒立の狀を訴へしを以て蒼をして位を天下に還へさしむ蒼、罪を帝に謝し私かに天平を弑せしかは帝大に之を怒り張輔、沐晟等をして安南を滅し交趾と改め布政司を設けたり

當時漠北胡元の形勢は其主脫古思帖木兒の弑せられしより國力振はすと雖も其遺孽は益、蔓延して太祖の曾祖父合不勒(カブール)の裔なる帖木兒(テムール)猶の如きは元末(順帝至元廿三年西歷千三百三十六年)撒馬兒罕(サマルカンド)の東南一村落に生れ年廿四にして都を撒馬兒罕に定め屢〻太祖(元璋)と使聘交通せしか察合台、伊蘭等の諸汗國を合せ北は露國を征し南は印度を平け聶離(印度恒河の支流の側)に據りて皇帝と稱し帝の世に及ひ復、北に還り道を別失八里(甘肅省廸化府の西)に假り來り侵さんことを圖す(帝の永樂三年西歷千四百五年)帝其威を畏れ一時之か備を爲せし事あり帖木兒の玄孫巴伯爾(バーベル)は後世印度に於て亦、莫臥兒(ムゴール)朝を建て(西曆千五百廿六年明末路清初代)威名祖父に繼きけり莫臥兒は乃ち蒙古の轉訛なりと云ふ

又、帝の世にありて元の遺臣阿魯台(アルタイ)は元の宗族本雅失里(ホベンヤシリ)を奉して韃靼(タタール)可汗と爲し和林に據れり帝は郭驥をして之を招諭せしむるも之を殺して命を奉せさりしかは親征して斡難河に至る本雅失里は河を渡りて逃く帝乃ち石を擒孤

山に勒して曰く瀚海爲鐏、天山爲鍔、一掃胡塵永清沙漠と遂に北京に凱旋せり

已にして元の部酋瓦剌（即ち斡亦剌部天山北路の邊を領す）の馬哈木は其主本雅失里を弑せしを以て阿魯台、内附を求め故主の仇を復せんと請へり帝之を義とし阿魯台を封して和寧王と爲し親ら瓦剌を征す阿魯台、亦、叛服常なきを以て親征し歸途遂に在位二十六年壽六十五を以て崩す是を紀元二千八十七年後小松天皇應永三十一年の事とす

是より先、建文は我、足利義滿に日本國王の號を贈り又、帝は其死を吊し恭獻王と諡し且、我、邊民の抄掠を禁せんとして鎭西の山を封して壽安鎭國之山と號し自製の碑文を贈與せし事ありたり太子高熾、立つ是を仁宗とす

仁宗の時、其弟漢王高煦は反を謀りしか帝夙く崩するを以

て其子宣宗之を平けたり初、成祖は安南を平けて布政司を置きしも其叛服常無きか爲め帝は其故主陳氏、三世の孫陳暠をして安南王に封し其他、田租を減し貧民を賑はし北方亦、無事なり夏原吉、楊士奇、楊榮、楊溥、薛瑄等、皆、賢才を以て朝にあり瑄、初、詩文に志せしか後、力を朱子學に致す道學を以て著はる帝の世、内外無事を以て明初至治の時と稱す是全く成祖の餘烈たり然れども其子英宗に至り内宦外虜の禍ありて國勢大に變したり

第二章　内宦北虜の禍

瓦剌の來寇

英宗幼にして即位せるを以て太后張氏、朝に臨み楊士奇、李賢等の徒を用ひ朝政稍、治りしか太后崩するに及ひて宦者王振、專恣を極む初、太祖宦豎を抑制せしも

王振の專恣

成祖簒立以來寵遇の厚きに乘し帝の時に及ひ王振、內、政柄を弄し外、兵權を握り薛瑄、于謙等の名流を貶謫したり時に瓦剌(ウエラ)の也先(イツセン)、入寇するあり

土木の變

瓦剌主馬哈木(マハム)は韃靼(タータル)の本雅失里(ホベンヤシリ)を弑し衆の附かさるを恐れ元裔脫脫不花を立てゝ可汗と爲し其子脫歡は諸部族を併呑し阿魯台を殺し勢甚盛なりしか脫歡の子、也先に至り遂に南侵して大同(山西省大同府)に至り過くる所、陷沒せさるはなし是に於て王振、帝を挾み居庸關を出て土木(直隸省宣化府土木堡)に至り大に破らる護衛將軍樊忠、怒り先つ王振を鎚殺し苦戰之に死す也先、遂に帝を執へ北に去る

瓦剌の媾和及其滅亡

是に於て京師震駭、帝を以て上皇と爲し其弟景帝を立つ也先大擧して紫荊關(直隸省保定府の西)に逼る廷臣懼れ南遷を議す于謙關外の食塲草料を燒きて敵の資を絕ち之を拒く也先、退

上皇の復辟及曹吉祥等の謀反

き更に來り遂に上皇を還へし和を媾せり既にして也先は其主、脫脫不花を弑し自ら田盛可汗と稱したりしか其臣、阿剌の爲めに弑せらる阿剌、亦、韃靼の孛來(ブライ)の爲めに殺をれ瓦剌、是に於て滅亡せり孛來乃ち脫脫不花の子麻兒可兒(マルクル)を立つ是を小王子と號す是より韃靼の勢、復、熾なり

內宦の跋扈　瓦剌、媾和の後、帝は上皇の子見深の儲嗣たるを廢して其子見濟を太子と爲し上皇の徒、宦官王浪、王堯等を誅せしかは上皇之を啣み宦官、亦、之を怨みたりしか帝の不豫に乘し宦者曹吉祥は石享、徐有貞の徒と謀り帝を廢して郕王と爲し上皇をして復辟せしむ已にして景帝崩し其子見濟、亦、夙く薨せり是に於て曹吉祥、徐有貞等、復辟の功を恃み專橫の極遂に反を謀り誅せらる上皇又、李賢に任し治を圖り遂に復辟八年壽三十八を以て崩す遺言あて官人

の殉葬を禁せり實に盛德の事と爲す子見深立つ是を憲宗とす

汪直の專權

初、成祖は東廠を設け宦豎をして奸惡を詗刺せしめたりしか憲宗、亦、之に倣ひ西廠を置き宦者汪直をして之を督せしむ汪直、恣に大獄を起し又出でゝ遼西の散出哈、韃靼の小王子の入寇を防き威望甚高く驕横益、盛なるを以て帝乃ち西廠を廢し之を疎斥したりしも帝崩し其子孝宗の時に及ひて宦豎の禍益、甚しく哈密、及、韃靼の入寇するあり

哈密韃靼の入寇及李廣の反

哈密は其地瓦剌と相接し元の宗族此に封せられ明初以來屢、入貢したりしか是に至り其主阿黑麻と云ふもの邊境を騷かせしか爲め許進、彭清等をして之を擊退せしむ又劉銀王越等をして韃靼の小王子を防かしむ時に宦官李廣は妖術を以て帝の寵遇を得、權、内外を傾け遂に異圖を抱き誅滅

劉瑾の專恣

せられたり

己にして帝崩し其子武宗の時に至り宦者劉瑾は馬永成、高鳳、羅祥、魏彬、丘聚、谷大用、張永の徒と相結ひ自ら王振の人と爲りを慕ひ事を用ひたり時人之を八虎と稱す、韓文、王守仁の徒、其意に逆ひ疎斥せらるゝ瑾、是に於て益、威權を恣にし藩王の意を激怒し寇賊亦處々に横行するに至れり

安化王の叛

藩王の異圖　安化王寘鐇は姦臣劉瑾を誅するを名とし其據都慶陽府（陝西省慶陽府安化縣）に反す楊一清、及、宦者張永等之を平く初、楊一清は張永に謂つて曰く藩宗の亂は除き易きも國家の内亂は測るへからす其意、蓋、劉瑾を誅除せんことを勸むるに在り張永之に感し〳〵寘鐇、討平の後、私かに帝に奏し其罪惡を擧け之を誅す是に於て張永一族、封爵を得、其徒魏彬、馬永成等の宦侍、亦、政柄を弄す時に寧王宸濠の叛する

宸濠の叛

あり

宸濠は太祖の子寧王權の後を以て南昌(江西省南昌府)に封せられ劉瑾に賂ひ護衛を有し久しく不軌の心を蓄へ江西の諸賊を煽動し勢甚盛なり帝之を聞き江彬の勸めに因り親征せんこす王瓊諫めて曰く王守仁の在るあり寧王必す擒に就かんこ帝聽かす南京(陵金)に至る時に王守仁は江西の提督を以て福建の寇賊進貴等を平けしか宸濠の變を聞き義兵を募り南昌に入り其亂を平く帝其捷を聞き駕を還へし遂に在位十六年にして崩せり憲宗の次子興獻王の子厚熜立つ是を世宗こす

大禮の議

世宗即位の初、廷臣をして生父興獻王の稱號を議せ～む廷臣楊廷和、何孟春等主こして宋濮王の故事に倣ひ孝宗を考こし興獻王を叔こ稱せしめんこせしを以て帝旨に忤ひ大

江彬の謀反

に貶黜せられたり已にして帝議を定め孝宗を皇伯考こし興獻王を皇考こ稱し太廟に祔祀するに至れり是を大禮の議こ稱す當時江彬專恣を極め反を謀りて誅せられ王守仁亦帝の時に及ひて死せりき

守仁の學術及諸儒の輩出

守仁字伯安陽明こ稱す餘姚(浙江省紹興府餘姚縣治)の人是より先吳與弼陳獻章丘濬楊一清の徒程朱の學を主張せしか皆守仁に先ちて死す守仁獨宋陸九淵の說に基き知行合一の論を以て諸儒の外に立てり其門人鄒守益羅洪先皆其說を擴張せり又唐寅柯維騏李攀龍歸有光の徒文辭を以て稱せられたり

第三章　北虜南倭

北虜の入寇

世宗の時藩王及寇賊の亂熄むこ雖も北部

韃靼の分離

韃靼の患あり韃靼小王子は當時稍ゝ兵を厭ひ東方に徙りて土蠻と稱せり其族人吉囊、及、弟俺答等、河套（甘肅省夏州の北賀蘭山の東即ち鄂爾多斯（オルタン））に據りて諸部の長と爲り屢邊境を侵せしか吉囊死し諸子河套に散處して勢、分れたり惟、俺答日に强盛を極め大同（山西省大同府）を犯し白河（一名白遂河其源山西省化府赤城縣に在り）の東に營し兵を分ちて四掠せり王杼、王儀、仇鸞の徒之を拒く已にして掩答去り仇鸞、及、權臣嚴嵩等は俺答の義子脫脫に結ひ馬市を大同に開く然るに俺答朝に市し暮に寇し馬を併せ掠め去り北方常に其蹂躙を免る能はす

嚴嵩の姦惡及總寧の忠死

斯く北部騷擾の時に際し帝は方士を信し黃白金丹の說を喜ひ土木を興し權臣嚴嵩を寵任せり嚴嵩は信任の厚きに乘し曾銑、沈鍊等の忠直の士を罪し其子世蕃と共に益、驕橫を極めしかは楊繼盛と云ふもの上疏すらく方今外にある

の賊は俺答たるも內にあるの賊は惟、嚴嵩のみと然るに反りて帝の怒に觸れ罪せられて死す已にして帝は嚴嵩の姦を悟り之を罷そけ其子世蕃を誅したり是時已に南方我邦人の沿海を騷かすあり之を倭亂、又は倭寇と稱す、邦人の所謂海賊、是なり

南方の倭亂　太祖以來世、我、足利氏と使聘往來し所謂倭寇の患稍ゝ微なりしか帝の時に至り足利義晴は大內義隆をして來聘せしむ已にして大內氏滅し兩國の勘合印信を失ひ尋て足利氏、又、大に衰へ兩國の交絕ゆるに際し倭寇之に乘し侵掠を試みたり初、太祖は福建、浙江、廣東に市舶司を置き我、商船の來往を許したりしか是に及ひて帝は其侵掠を恐れ市舶司を罷め海禁を嚴にし之を防きしも其患益、甚しきを以て又、海禁を弛めたり然るに商民之に乘し奸惡を爲

汪直倭寇に與みす

（籌海圖篇）

戚繼光防倭鴛鴦陣圖

し我、商賈をくるしめしも官司之を禁せさりしかは倭寇大に激昂し舟山（浙江省寧波府定海廳治）台州（浙江省台州府）等の沿海を侵し南京に及へり

朝廷之を畏れ侍人趙文華をして海神に祭告せしむるに至る然るに沿海の窮民及ひ朝廷失職の士汪直、徐海、毛海峯、彭老生等往倭寇に與せしを以て倭寇大に地理に

倭寇の平定

穆宗の治

長し長蛇、蝴蝶の陣を以て益、陸地を蹂躪し扁舟に乘し海洋に出沒し制する能はさるに至る已にして汪直、歸順し徐海、誅に伏し朝廷の守備、亦、整ひ俞大猷、兩浙を經營し戚繼光、閩海を驅除し王杼、湯克寬、胡宗憲の徒、先後大に力を盡し其亂を平けたり是に於て邦人逃れて臺灣、印度、及、南洋諸群島を抄畧したり帝在位四十五年にして崩し太子載垢立つ是を穆宗とす（我紀元二千二百二十七年正親町天皇永祿十一年織田信長入京の年）穆宗の時南方倭寇の患、稍熄み北方の俺答、亦、歸服し張居正、政治に參し國家稍、治まりしも帝在位六年にして崩し其子神宗の世に及ひて內外の關係屢、起り朝政振ふ能はさるあり

第四章　神宗の政跡

朝鮮の出師　神宗即位の初、張居正は大學士高拱と遺詔

張居正の相略

秀吉の出師

を奉し共に帝を輔くへきに宦者馮保と結抱して高拱を斥け政柄を弄せり然れとも其人相畧あるを以て政治大に見るへきありしか居正死ゑ馮保斥けらるゝに及ひて西北寧夏（甘肅省寧夏府）拜反を謀り東方朝鮮の師起れり

朝鮮は其祖太其以來世、正朔を奉したりしか帝の時に當り其十四世の孫宣祖（李昭）は荒淫にして國事大に亂れたりしかは我、豊臣秀吉は之に乘し道を朝鮮に假り來り伐たんとして其將小西行長、加藤清正等の諸將をして朝鮮を蹂躙せしむ（神宗萬曆二十年我後陽成天皇文祿元年）時に朝鮮は柳成龍、李舜臣等の人物ありしも忽、我、諸將に破られ后妃二王子は俘にせられ王は義州（朝鮮平安道義州）に逃れ來り救を求む會、暹羅の使者明廷に來見し兵を出たし我邦の虛に乘せんとす和議調はす遼陽總兵祖承訓をして之を援はしむ承訓、平壤に至り行長の爲め

日明の媾和

和議の破裂

鄭芝龍山田長政

に破らる時に李如松は寧夏を平けし餘威を以て進んて平壤に向へり是より先、嘉興（浙江省嘉興府）の人沈惟敬と云ふもの兵部尚書石星と相結ひ私かに行長に通し和を許し封貢の約を爲し兩國の間を彌縫せしか其議遂に調ひ行長清正等の諸將兵を撤するに至れり

是に於て楊方享、沈惟敬等の徒冊を奉して我邦に來れり然るに事破れ行長、清正等の諸將、復、師を率ゐ朝鮮に至る朝廷、劉綎、刑玠等をして之を援はしむ已にして秀吉死し行長、清正等師を班へし朝鮮の役、始めて終りたり是を帝の萬曆廿六年我、後陽成天皇慶長三年の事とす

已にして我、豊臣氏衰へ德川氏將軍と爲るに及ひて好を朝鮮に通し又、山田長政は臺灣に航し、後、暹羅に至り其國王の爲めに力を致したり（慶長九年萬曆三十三年に至る）尋て泉州南安（福建省泉州府

安縣)の人鄭芝龍と云ふもの我、肥前平戸に來り河内浦に住し我慶長十七年(萬曆四十年)を以て德川氏に謁したりと云ふ

滿洲の肇興　東方朝鮮の役、已に平らきしも奴兒哈赤の東方に興起せるあり奴兒哈赤は愛親覺羅氏にて建州(盛京省奉天府治)女眞部の人なり其先、市庫里雍順と云ふもの長白山東、俄朶里城(寧古塔の西南)に居り國を滿洲と稱す其後、孟特穆は赫圖阿剌(盛京省興京府)に徙り歷傳して奴兒哈赤に及ひ年廿五にして兵を擧け百人の衆三十副の甲を持し遂に尼堪蘭を圖倫城に征し(萬曆十一年)隣部を幷せ北方蒙古の喀爾喀(吉林省寧古塔南方)諸部を服し後金と號し明廷を南朝と稱す尋て貝勒諸臣の勸に因り年五十八を以て帝號を稱し又、滿洲文字を制し八旗の制を設けて葉赫(吉林省吉林府治)を滅し朝鮮を征し遂に開原(盛京省奉天府開原縣)鐵嶺(同省奉天府鐵嶺縣)瀋陽(同省奉天府承德縣治)等を陷れ城を撫順(奉天府瀋河畔)邊外に築けり(萬曆四十七年)是を太祖とす朝廷大に震恐して屢諸將をして之を拒かしむるも皆其破るゝ所と爲れり

朋黨の排擊　斯く外事日に逼り帝、亦、土木を事とし國用給せす山西(山西省大同府治)汝南(山東省濟南府歷城縣治)等の諸礦を開かしむ然るに其利は汚吏奸民の漁するを免れさるを以て宦者をして市店、舟船、茶鹽等の稅を徵收せしめ一時の急を救はんとせしも其弊の甚しきのみならす中外朋黨の軋轢するあり

徵稅及開礦の弊

東林黨派　初、吏部郎顧憲成、郎中趙南星は宰相王錫爵と隙を構へ二人遂に貶黜せらる憲成は無錫(江蘇省常州府)の人、邑に宋の楊時の建設せし所の東林書院あり弟、允成、及、高攀龍等と程朱學を院中に修め王守仁の學說を排擊す鄒元標、亦、首善書院を京師に建て李三才等と憲成の徒に附和し互に時政を諷議し人

宣昆黨及葉向高の調和

齊楚浙の三黨

利瑪竇湯若望

物を裁量せしかは朝士往、之を慕ひ互に應和するに至る是に於て東林の名大に見はる然るに湯賓尹、顧天峻は朝廷に於て別に一派を爲し東林の徒を駁す是を宣黨、昆黨と稱す大學士葉高は超然黨派の外に立ち其調和を謀りしも東林派に擬せられて位を斥けらる其他、齊、楚、浙の三黨あり齊は亓詩敎、周永浚等、之か魁と爲り楚は官應辰、吳黨嗣、之か首と爲り浙は沈一貫、劉廷元、姚宗文の徒、之か領袖と爲り務めて東林派を排し道學を攻むるを以て事とせり然れとも是多く學者門戸の見より黨爭を生するものなれは其弊少からすと雖も當時學術の旺勢、知るへきなり

帝の世にありて歐人利瑪竇（マチウリン）來り萬國圖を作り且、其徒龐廸（バン）我、艾儒略（トシヤジユルフアロチー）は職方外記を作り共に天主耶蘇敎を廣む後、徐光啓、李之藻等頗る其敎を信し天文、曆算、火器を學ひ盡く其術

神宗光宗の崩去

徐、利二氏肖像

を盡くし後利瑪竇（マチウリン）の徒、羅雅谷（ゼームス）、湯若望（ロー・アダムシアール）等と謀り崇禎曆を作るに至る帝在位四十八年壽五十八にして崩し（我紀元二千二百八十年）其子光宗立つ帝病み寺丞李可、灼の紅丸を服し在位僅か一月にして崩し太子由光立つ是を熹宗とす